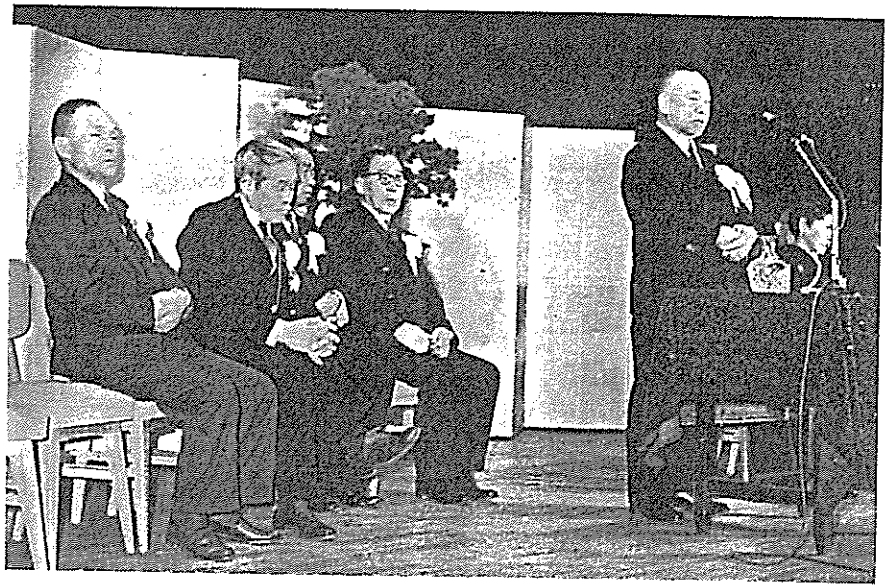
追想記

北映吉光三四/記録人会



金婚式当日の風景（その３）　来賓としての挨拶，高杉晋一氏

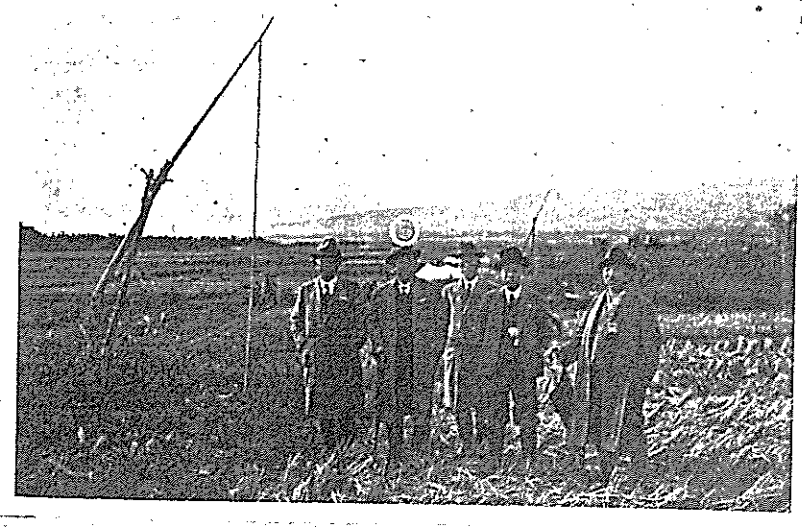
金婚式当日の風景（その４）　来賓としての挨拶，大浜信泉先生

金婚式当日の風景（その５）　北先生の答辞

金婚式当日の風景（その６）　北先生御一家と側近者

金婚式当日の風景　昭和30年４月，上野静養軒にて（その１）
北先生と佳子夫人

金婚式当日の風景（その２）
来賓としての挨拶，浅沼稲次郎氏



昭和三十年佐渡郡内農村視察
○印が北先生

国会議事堂正面にて西蒲原郡の有志の人達と写す
○印北先生、△印北村前新潟県知事

新党工作を話し合う鳩山派の面々　右から林譲治，星島二郎，北昤吉，石坂豊一，世耕弘一，鳩山一郎，同夫人，安藤正純，植原悦二郎，芦田均，大野伴睦，森幸太郎（敬称略）

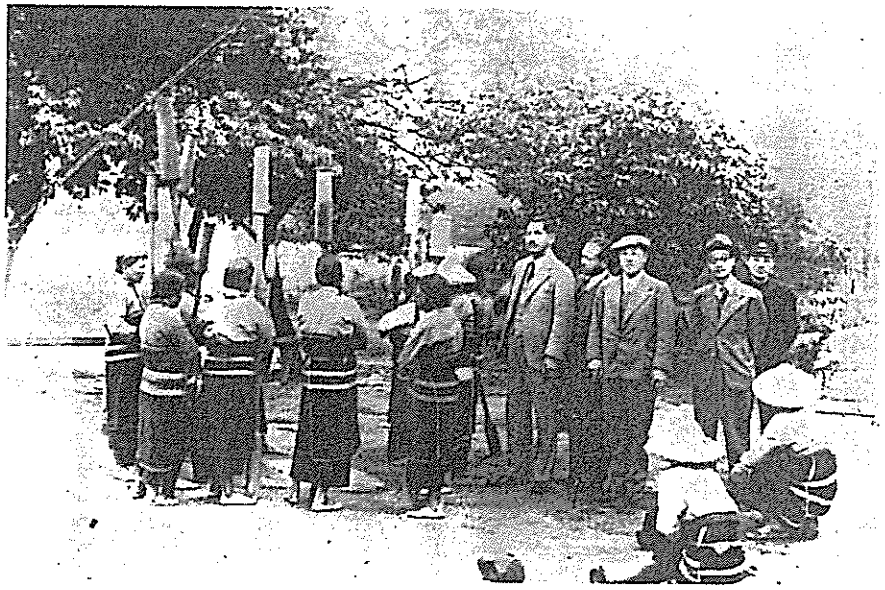
日比谷公会堂にて　吉田内閣を痛烈に批判する北先生

追放解除発表の新聞をみて喜ぶ（左より佳子夫人，北先生，現草野夫人）

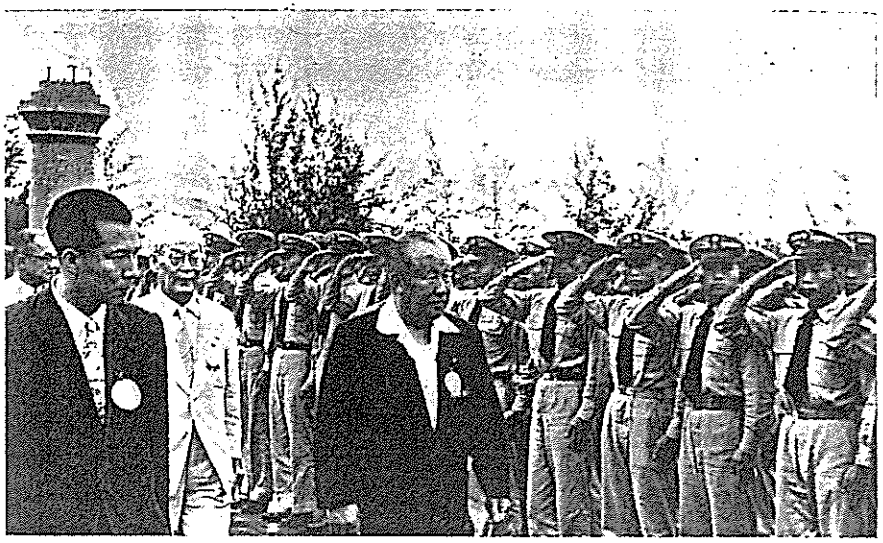
↑ 追放解除後の選挙（昭和二十七年）
車上左から阿部有一氏、北先生、広橋真光氏夫人（元梨本宮第三王女）石原雄一氏

↓ 昭和二十七年選挙で佐渡遊説第一歩
（佐渡両津埠頭改札口にて）

オスローの街を浅沼稲次郎氏（右）と散歩

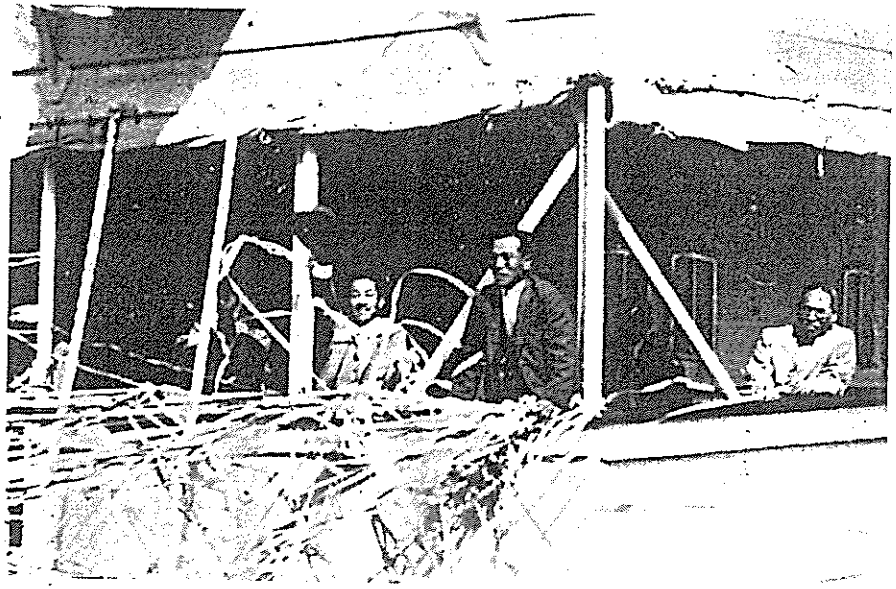


昭和５年，台湾視察当時，鳥打帽をかぶっているのが北先生

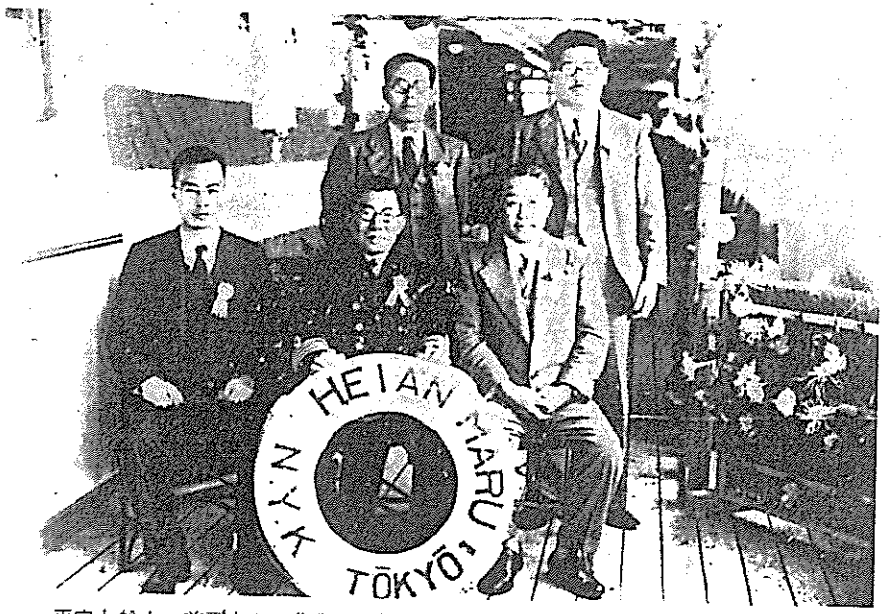


昭和31年台湾視察当時（その１）　台湾軍を閲兵
○印が北先生，その後の白服が渡辺銕蔵氏

昭和31年台湾視察（その２）　台平郊外にて　○印が北先生

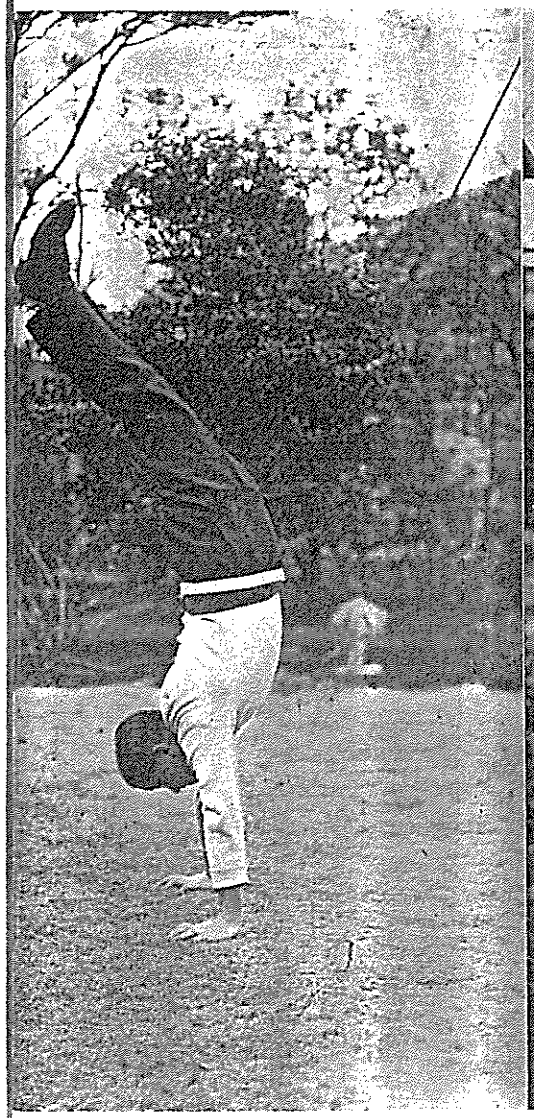


ノルウェー，オスローで開催された，万国議員大会に出席のために乗船（昭和14年）



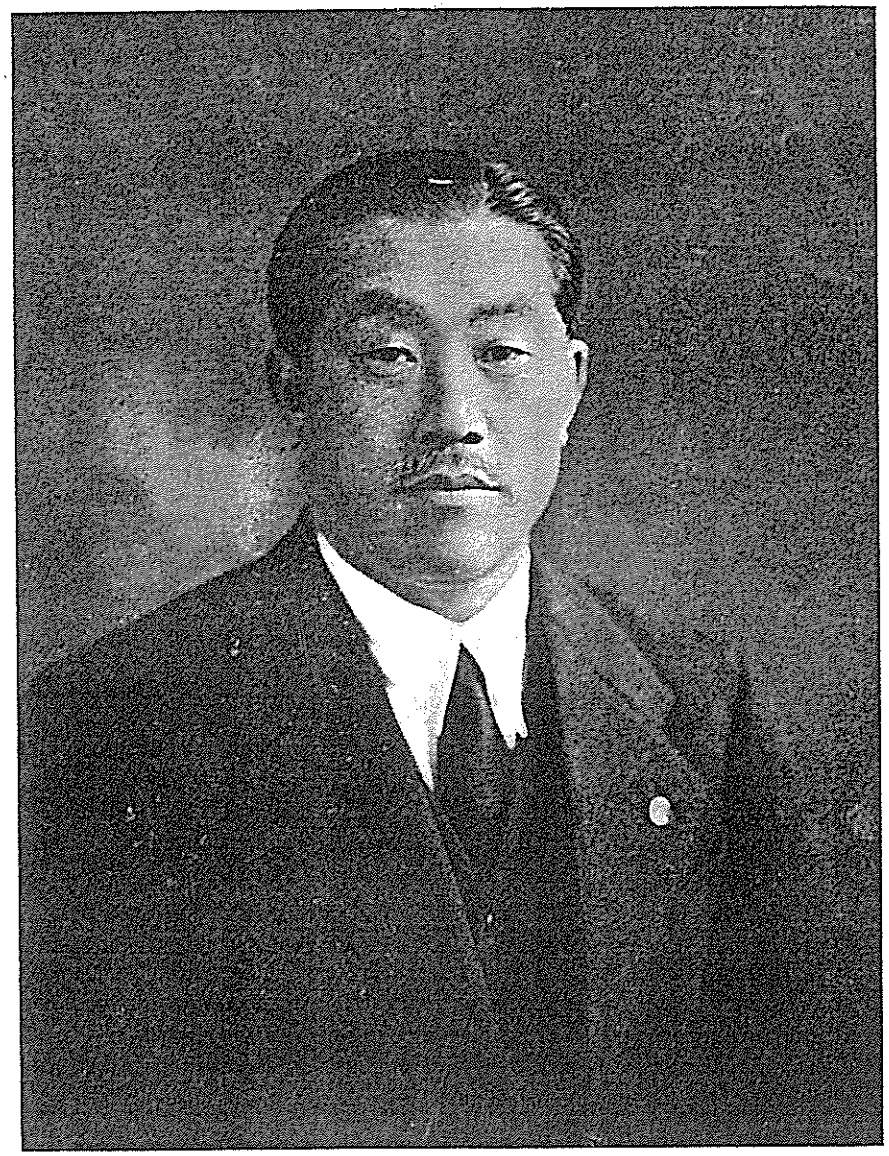
平安丸船上　前列右より北先生，船長，船田中氏，後列右が浅沼稲次郎氏

万国議員大会終了後の晩餐会風景　○印が北先生

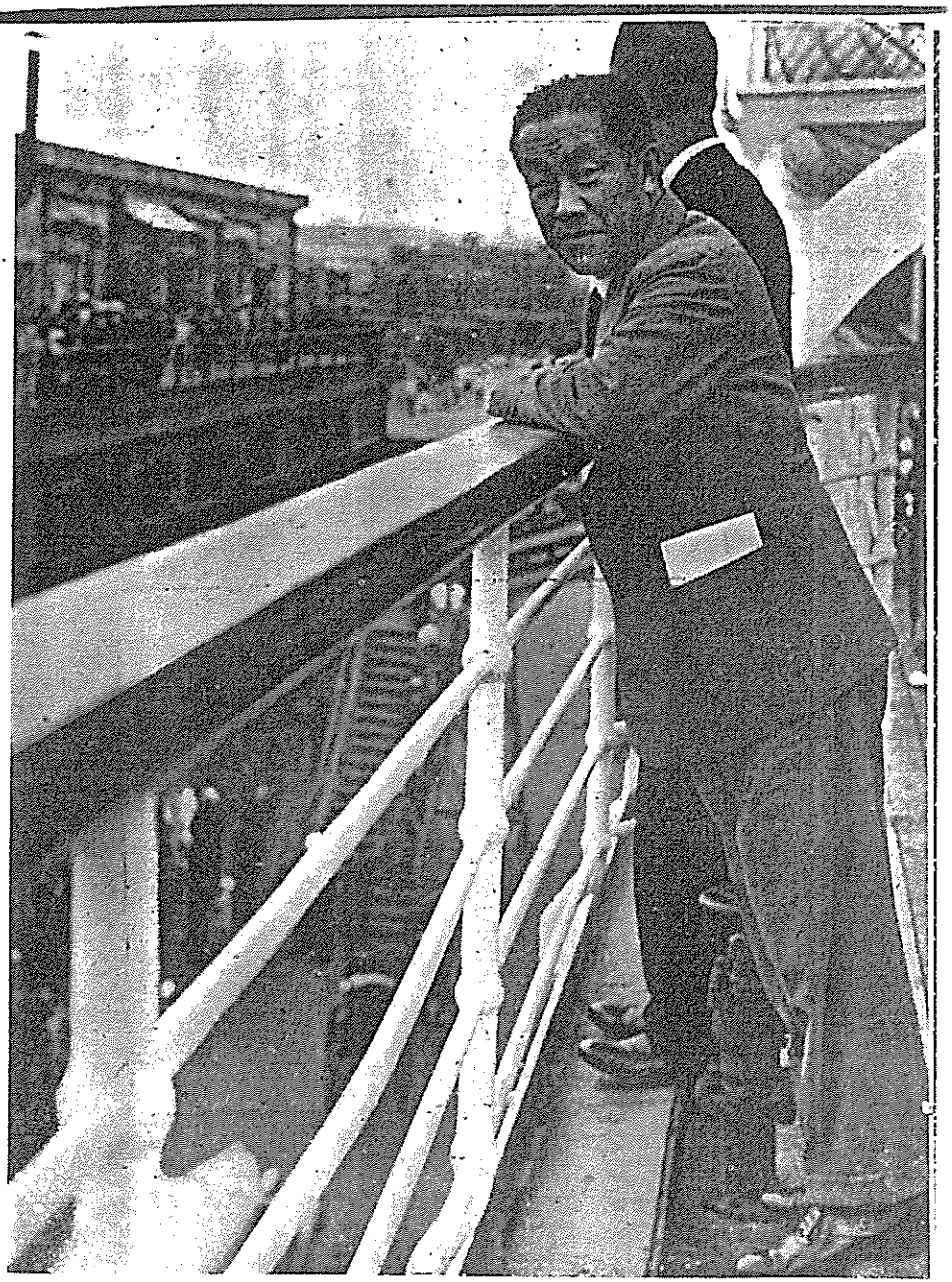


戸塚町の自邸で自慢の逆立ち（大正12年）

真剣での構え（戸塚町の自邸）



43歳当時の英姿



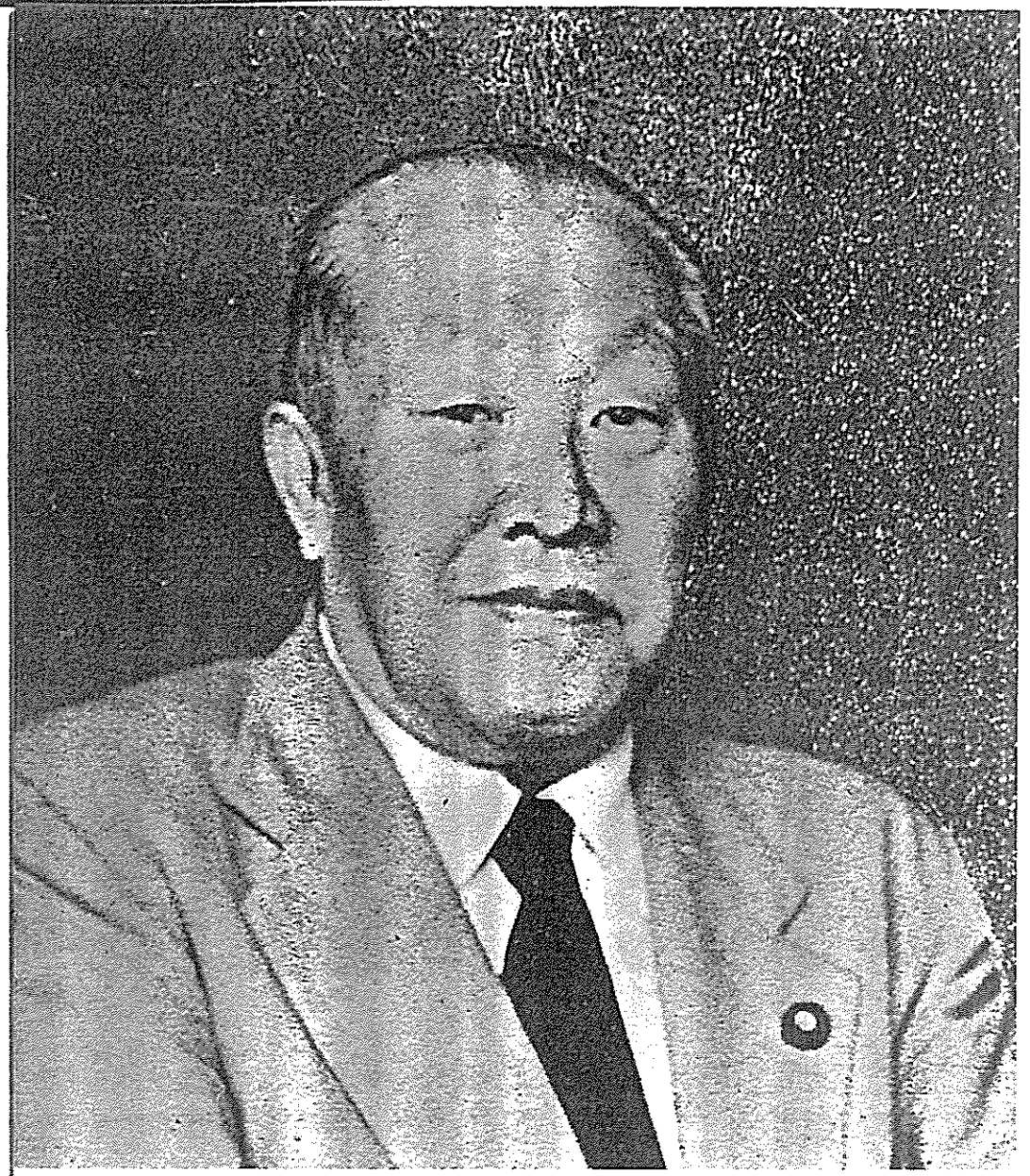
第一回洋行　大正7年，平安丸にてアメリカへ向う

アメリカで35歳の誕生日に写す

↑北先生の新婚当時
左から佳子夫人、高杉晋一氏、北先生。二人おいて
岡野保次郎氏

実業家として世に出た当時のお二人
岡野保次郎氏（左）高杉晋一氏（右）

早大講師時代の北先生



晩年の北先生（国会議員在職中　昭和30年　73歳）

少年の頃の北三兄弟　右　昌作　14歳
真中　一輝　18歳
左　吟吉　16歳

題字は　高杉晋一氏

三菱電機株式会社相談役
三菱経済研究所理事長
経団連経済協力委員長
同　経済調査委員長

昭和一年八月七日
中野惇逝去にあたり
三周忌追悼会
北畠夫先生の想い出
元理事　保坂邦郎

この書を、北吟吉先生の御霊前に捧げます

水戸附近の那可川で鮎つりの一こま
右から北先生，三木武吉氏，三木氏の令嬢

晩年の北先生御夫妻

目次

北吟吉先生の想い出……岡野保次郎……27
先生と私……高杉晋一……33
博覧強記の人……星島二郎……39
私学振興の恩人……大浜信泉……42
北先生の追憶断片……赤松保羅……44
想い出のところどころ……加藤清二郎……49
先生の半生をおもう……浅岡信夫……53
先生と選挙戦を偲ぶ……村田晴彦……60
一輝・吟吉両兄弟について……加藤好正……67
おやじ追想記……三瓶勇治……71
恩師の一影……稲辺小二郎……78
永年の御交誼に感謝……北佳子……87
北先生の略歴……88
北先生著書名……90

北昤吉先生の想い出

高橋保次郎

私が一昨々年、家内の突然の死に逢ってからは、これは経験のない方には御判り難い点ではないかとも思われますのですが、どうも故人の思い出というものは、その故人と近ければ近い程、良きにつけ、悪きにつけ、何となしに暗い陰が伴い勝ちなものでして、自然、笑いの神経を動かす様な、ほほ笑ましいという様な場面は、なかなか述べる事がむずかしいと思われますので、今日の私の『想い出話』は、成るべく私と先生の間の明朗な方面だけをとって話して見度いと考えるのであります。ところが、それが果たして、そんな風に出来ますかどうか、甚だ自信がないのでありますが。

新婚家庭に居候となる

今から約四十何年か前のことと思いますが、私と高杉君とが土浦中学を卒業して、仙台の第二高等学校の入学試験を受けることになった時に、先生の曰く

『どうもお前達二人は国粋保存的であり、大和魂的豪傑肌ではあるが、西洋的、才子的でなく、従って英語の方は余り得意でない様に思われるから、その点で入学をしくじる様なことになるかも知れない。それではまずいから、俺が入学試験までの三ヵ月間、みっちり英語を教えてやろう。四月から二人共俺の家に寝宿りして英語の勉

強を、しっかりやりなさい』

と申された。その当時は、先生御夫妻は、新婚ホヤホヤの時期であらせられて、あの真鍋の土浦中学校の這入口の門の前の、一寸高台になっている所に新居を構えておられた。それで、飲み水や、風呂水はその坂下半町ばかりの下の家の井戸から手桶に汲んで、それを両手にさげて持って来るのでした。昼間のうちは、吾々二人は学校卒業後ですから何処へも外出する必要はない。従って二人は勉強に飽きると右の様なことをしたり、薪割りをしたり、または、玄関や家の周囲のお掃除をしたりしておりますのですが、午後四時前後になると先生が学校から帰宅して来られる。

ところで、先生は非常に相撲が御好きで、雨さえ降らなければ、下の隣りの家との境の地べたの土を柔らかく堀り返して造った素人造りの土俵で、先生とわれわれ二人、時には他の下級生や、近所の若者等も飛入りで這入って来られて、盛んに相撲を競う。雨の降る日には家の中で腕角力や、足角力をやる。学校では、北先生は一番若い英語の先生として非常に親しまれ、また尊敬もされておったのですが、年齢も吾々と五才くらいしか違わないし、家庭に帰ると、まるで吾々の友達みたいな風で、少しも先生ぶることもなく、所謂『先生といわるる程の馬鹿でなし』という諺を地で行った様な風でした。

それで夕方暗くなるまで、ヘトヘトになるまで相撲をやるのですから、お腹はペコペコに減るし、その当時は、まだ物価の安い、御米の値段も一升十五、六銭くらいではなかったかと思うのですが、それでも右に申しました様に、空腹の男三人が『居候、三杯目にはソッと出し』などという様な遠慮などは、とても出来ない連中ですから、腹一杯食うのです。ですから、恐らく新夫人であらせられた奥様は、今考えて見ると、御主人の月給もその頃は余り多くもなかった様でありますし、食事代だけでも大変なものだったろうと想像されるのであります。それで、しばらくたってから、遠慮をして食事だけは近所の仕出し屋で食べることにした様に記憶する。

ところで、吾々の英語の勉強の方は、夕食後にやることになっていたのですが、御承知の通り、先生は若い時から博学であらせられて、一度読まれた本の内容は、昔、荻生素来という学者が『袋頭脳』とアダ名されていたという話

を聴いた事がありますが、先生は恐らくそれ以上ではなかったかと思われるくらい、記憶が良く、種々話の種子を豊富に持っておられたので、何かのきっかけで、何か一つの話が出ると、それからそれへと話は枝葉に飛び、しかも、微に入り細に亘って、広い視野から正確に話されるので、知識慾の旺盛だったわれわれ若者には、面白くて仕方がない。ですから、大抵その晩の本当の勉強に取掛るのは、毎晩彼此れ、夜の九時頃になってしまう。

何でも、キャラクターという本、すなわち、よく高等学校の試験問題等にはその中から出る場合が多いというのでその本を教わったのですが、前に申上げた様に、身体はヘトヘトに疲れてはいるし、しかも、腹一杯夕食をした後ですから、先生はその本を早口に読んでから、それを水の流るるが如くに早口で日本語に飜訳してくれるのですが、われわれ二人は、昼間の疲れで眠くて眠くて、到底頭の中になど這入りっこはない。

そんな具合で、三ヵ月は夢の間に過ぎてしまった様な気が致しますのですが、それでも幸にして、私も高杉もその年七月の仙台の第二高等学校の入学試験を一発で受かった事は、幸運なことだったと今でもツクヅク思っているのであります。

外遊の裏話

また、私と北先生との間柄については、私の「講演集」の中の「よもやまばなし」という中に、岩崎小弥太大社長を語る項目でふれておりますので、その部分をここに引用させていただきたいのであります。

ところで一寸余談になるが、私が恩師の北岭吉先生のことを三土忠造先生を通じて岩崎さんに頼んだことがある。北先生のことは住田君は御存知のことと思うが、私の中学時代の英語の先生で、私にとって、印象にのこる恩師の一人ですよ。あれはたしか大正六、七年頃と思うが北先生は早稲田大学から欧州に留学することに決った。ところが、大学から出る学費は非常にすくない。そこで私は三土先生に会って、岩崎さんから北先生のために少し学費を出して頂けないか頼んでみた。三土先生と岩崎さんの仲は前の話に出た通りですが、私にとっては

大学時代の保証人として、ずっと御指導を頂いたわけです。私が頼むと三土先生は、北先生の著書とか、論文とかいろいろ調査しておられたが、稀な秀才であることがわかったのか、岩崎さんに紹介して下さることになった。三土先生は、当時岩崎さんのこういう問題に対する相談相手というような恰好でしたがね。

三土先生から北先生を岩崎さんに紹介しようという返事をもらったとき、私は神戸にいたんだが、折悪しく風邪をひいて寝ていた。ちょうど土曜日だったが、その手紙を受取ると、これは恩師北先生にとっての一大事だ、すぐ上京せねばならんと思ったが、あいにく嚢中に一文もない。私は今でも貧乏で有名だが、その時は全く一文さえもない。仕方がないので次の日の日曜の朝、当時神戸造船所の副長であった永原伸雄さんのところへ出かけ金を百円貸して下さいと頼んだ。ところが永原さんも日曜に突然そういわれても百円は持ちあわさん、五十円なら貸そうといって、五十円を貸してくれたので、それを持って大急ぎで上京した。

それから一週間ばかりして三土先生に会ったら、岩崎さんが『僕は北という人は全く知らない。しかし日本には優れた文明批評家というようなものが少いのは遺憾である。欧州には、例えばロンドンタイムスにしても、ニューヨークタイムスにしても、一般国民に先んじ、国家の向うべきところを洞察し、輿論を指導する先覚者といわれる様な有名な論説委員が沢山いる。日本は文芸批評家はいるけれども、哲学的の高い教養を持った文明批評家という類の人が少い。そういう人が生れることを待望していた矢先でもあり、その方面の勉学をして貰うこととして、北君に月々若干の御援助をしよう』といって下さったということであった。

一方、北先生が岩崎さんから後に渡航前に聞いたというのは『北君、私はあなたに条件は全然つけない。もともと、私は主義というようなことが大嫌いの男だ。それで条件でも何でもないが、もし希望を述べるなら、君は私と全く反対の立場に立ってくれても少しも差支えない。ただ日本が、将来世界の日本として立派に仲間入りの出来るよう、日本の思想界を指導するいわゆる社会の木鐸者となって欲しいね』ということであったそうだ。

外国での先生と私

さて、四十何年前の話が、大分長くなりましたが、若し時間が許されるならば、それから十年許り後のアメリカで北先生と合った話と、独乙のハイデルベルヒで会った話とをして見ようと思うのですが。

アメリカの方は、大正八年二月の非常に寒い頃だったのです。私は三菱造船から三菱商事のロンドン支店へ赴任する途中で、ニューヨークからその当時ボストンのハーバート大学に遊学しておられた北先生を訪問したのです。二、三日滞在しておったと記憶する。

ボストン辺の二月は寒い所ですから冬は雪も相当に降るし、その日はとくに一尺近くも雪が降り積って、自動車も若干困難するという程でしたが、先生は遠来の弟子である私のために、彼の有名な、またアメリカの誇りとする大哲学者エマーソン博士の墓と、同じく有名なるアメリカ詩人ゾローの墓とを案内してくれたのです。その当時、若き私は、非常に感銘を深くし、その墓石に刻んであった言葉等も一々ノートに書き留めて来た様な次第でしたが、何に致せ、今から四十五年近く前の事ですので、本年七十三才になった私、不幸にして北先生程記憶の良くない私では、それ等の言葉等も今では皆忘れてしまいました。

それから、その時のもう一つの記憶は、ボストン博物館に日本美術品の世話をされておった小林某女という四十才がらみの日本婦人がおられて、その御婦人と北先生は日本美術愛好者という意味で、余程昵懇にしておられたらしいのです。その小林某のお蔭で、同館所蔵の数多くの日本浮世絵や、尾形光琳の八ツ橋の絵その他を特別に出してくれて、見せて貰ったことを記憶しております。

それから次ぎは、大正十年頃、すなわち、今から四十年許り前のことですが、私がロンドンから日本に帰る一年許り前に、独乙に旅行をした時のことです。当時、先生は、フランス ソルボンヌ大学のベルグソン博士とならび称せられたハイデルベルグ大学の大哲学リッケルト博士について勉強しておられたのですが、そして同博士から非常に可愛がられて、その家庭内でのゼミナールにまで、加えて貰

っておられた。その時にも、私はボストンの場合と同様、先生の下宿に二晩許り宿らして頂いて、彼の「アルト、ハイデルベルヒ」で有名なライン河畔の古城を訪ねたり、河岸の有名な料亭（名は今は忘れた）において、芳醇なライン赤葡萄酒を御馳走になったりして、しばらく旅の疲れを癒したりしたことを覚えております。その当時の先生は、実に意気軒昂、周囲を呑む、の慨があった様に見受けられました。

当時のことは、先生の著書「哲学行脚」の中に詳しく出ておりますので、ここでは省略させて頂いて、私の「北先生の想い出話」を閉じます。

ただ、最後に一言付け加えておきたい事は、私達、高杉と二人が、実業家としては比較的哲学的であり、また、文学、美術、宗教、政治等に普通の実業家よりも造詣が深いということが、若しありとすれば、それは百パーセント、若い時から北先生の指導、訓育をうけた感化によるものだということを挙げておきたいのであります。

（元　三菱重工業株式会社社長
現　日本国有鉄道鑑査委員長）

先生と私

高杉吾一

土浦中学時代の北先生

北先生が早稲田大学を出られて土浦中学の先生になって来られたのは、私の中学三年生の時であった。今から丁度五十五年ばかり前の事である。

それから卒業まで三年間、先生から英語を教えられた。その当時の先生は、機械体操と剣道と詩吟が得意であった。声が大きく、小さな教室に響きわたる壮快な力強い音声であった。哲学の専攻だけに思想もあり理論もたしかで先生間の討論会などでは、何人も先生の議論に歯の立つ者はなかった。

常に勇気慓々として曲った事が嫌いで、正を踏んで恐れずという風があった。従来のおとなしい型の先生達とは、全くちがって型破りの存在であった。必然の結果として、若い生徒の心をすっかり捉えてしまって、全生徒の人気の中心となった。妙なもので、こうなって来ると、先生と気の合う先生と気に合わぬ先生との二派が出来て来る。先生と気が合って仲のよい先生は、三人ばかりいた。大峡秀栄先生、尾崎楠馬先生、小田原勇先生等である。皆北先生同様、若いはつらつたる先生達である。

特に面白いのは、当時の幸津国太郎校長がすっかり北党になって、先生には絶対の信頼をおいていられた。大峡先生は東大出の文学士で英語の担任、尾崎先生は高等師範出

で漢文の担任、小田原先生は早稲田大学出で国文の担任であった。その他年寄の先生方も、大部分は北先生の実力を認め先生を尊敬していて、最後には北先生に反対する者は一人もなくなった様であった。

大体教室で担当の学科だけを無難に教えている様な先生に、たいした教育者はないものだ。教科書を離れての話題のない様な先生は、生徒に対する影響力はあまり無いものだ。北先生は哲学者だけに、担当の英語の時間内でも時間外でも、青年にとって興味のある色々な哲学的、思想的の話か合間々々に飛び出して来る。これが実際は若い者の心をうって、人物を造るもとになっている様に思う。

かつて札幌農科大学の先生をしていた、有名なクラーク博士の話などが授業時間の間に出て来る。クラーク博士が帰国する時に、白馬にのって全学生に訣別の辞をのべた句の中に「青年よ野心をもて」（ボーイズ・ビー・アムビシアス）という語がある。青年はすべからく志を大にすべしという事だ。クラーク博士の教をうけた学生の中から、有名な人物が沢山出た。後年名をあげた人物の中にも新渡戸稲造、飯島譲、内村鑑三等、何れも第一級の人物が出た。人間は小成に安んじては駄目だという様な話が出て来る。従って若い生徒は、先生の授業を楽しんで待っている様になる。

かくして大いに若い者の志気を鼓舞された結果は、卒業生の実績に現われて来た。我々第九回卒業生は四十七人であったが、その半数以上が高等学校や専門学校に進学している。田舎の中学の実績としては、珍らしい事だといわれている。高等学校だけでも八人位はいっている。おそらく土浦中学においても、その進学率は最高を示しているのではないかと思う。これも偏に北先生の影響力であったと私は信じている。

柔道を通じて先生と親しくなる

五年生の頃、私は柔道部の委員をやらされたが、北先生が柔道部長であった。先生は他校との試合が大好きで、水戸、竜ヶ崎、下妻、佐原木の強豪学校とよく試合をしたものだ。当時、土浦中学の柔道部は、県下で一番強かった。主将は白田潔君で、学科の出来は悪かったが柔道は強かった。副将は岡野保次郎君で、これはまた腕力抜群で、腕角力では誰も敵する者がなかった。北先生も腕自慢で、よく岡野とやっていたが、なかなか勝てなかった。先生は英雄を愛する。白田は柔道で、岡野は腕角力で（もっともそればかりではないが）先生に愛されていた。

白田が成績が悪くて、五年卒業出来るかどうかあやしくなって来た。我々柔道部の選手は、何とかして同君を卒業させてやりたいと思った。それで私が英語の試験を白田に教える事になった。先生が机のまわりをぐるぐる巡っているので、なかなか教えられない。隙を見て答案のメモを白田に渡した。ところが運悪くちらっと先生に見付かってしまった。私はしまったと頭を下げて閉口していた。しかし、先生は知らん顔をして別の机の方へ行ってしまった。

こんな事で、白田はどうやらこうやら卒業する事が出来た。先生は英語には粋と俠との二字に該当する訳語がない粋俠は日本独特のものだ、という様な事をよくいわれた。白田も、先生の粋と俠との日本精神によって救われた様なものだ。その豪傑白田君も、戦前に、早くも過去の人になってしまった。

右の様な次第で、岡野君と僕とは、柔道を通じて特に先生と親しくなって行った。我々が五年生の時、岡野も僕も上級の学校に行く事は家計が許さない事情にあった。先生は何とかして我々を高等学校に行かれる様にしたいと、色々と心配された。そして岡野君は、同郷の先輩峯間信吉先生を通じて、三菱の菱友会の援助資金をうけられる様になり、僕は筑波下の大地主で親戚筋の糸賀庄治郎氏から学資をうけられる様になった。

先生のお陰で高等学校にパス

岡野君と僕とについては、北先生は夫々熱心に我々の人物や素質について推奨された。但し我々の学資援助には、条件がついていた。それは必ず入学にパスする事である。一回でパス出来なければ、そんな鈍才は世話出来ぬというわけである。こうなると、我々は石にかじりついても、どこかの高等学校に入らなければならない。我々も一生懸命だが、北先生も一生懸命だ。そこで先生とも相談して、一高は無理だから、二高をねらえという事になり、大急ぎで

受験準備に取りかかったのである。

先ず英語の力が足りないというので、当時新婚間もない先生の新家庭に二人が泊り込んで、ねじり鉢巻きで先生に付いて英語の勉強を始めたのである。まことに御迷惑な話であるが、先生も我々を推奨した以上、責任を感じられて何としても我々を入学させようという情熱のしからしめた処と察せられる。

かくて我々は幸運にも揃って二高に入学する事が出来た。我々の入学を心から喜んでくれた人の一人は、北先生であった。その後、岡野君も僕も順調に大学に進み、卒業後は共に三菱に入社して今日に及んでいるのであるが、その間、我々は、終始変らぬ先生との親しい交りを続ける事が出来た。

政治家としての先生

我々が高等学校に進学して後、先生の一身上にも大きな変化があった。我々は始めから先生が中学の先生で一生をおわられる様な人ではないと信じていたが、果してその後先生は東京に出られ、中学の先生や大学の講師などをしていられたが、縁あって岩崎小弥太男爵の知遇をうける様になり、独逸に長い間哲学の研究に留学する事が出来た。

先生は、かくて、英米独仏の哲学の大家に付いて哲学の議論もし、研究を深めた哲学行脚は、すでに著書となって紹介されている通りであるが、帰朝後の先生は、心機の一転からか、ついに政界に身を投じてしまった。先生が政界に身を投じた事の得失については、私には論ずる資格はない。ただ云い得る事は、先生は政治家としてより、むしろ政治評論家として、また政策立案者として、偉大な功績を残していられる事である。

雑誌「祖国」における先生の政治評論は、高邁な思想と卓抜な識見、妥当公正な批判で、正に一世を風靡したものであった。先生の著書「昭和維新論」は、今の時代にも適用される立派な政治綱領と思われる。政治家としての生涯の間に、先生は一度も大臣にならなかった。なれなかったというよりも、ならなかったというのが、適切な表現であると思う。

大臣というのは、政治家として一度はなって見たいという、政治家の夢だ。先生はその夢をあえて栄達を願わない高潔な心事の持主であった。日本において政治家として成功するには、あくまでも押しが強く、利己第一主義で、人を押しのけても前に出るというガメツサが必要なようである。北先生が政治家として成功するには、もっと俗悪で不正直で利己的である事が必要であったように思う。

卓抜な識見

私は三菱に入ってから長い間、大阪や名古屋に勤務していた。そして東京に出る度に必ず先生をお訪ねして、色々と御話をきくのを楽しみにしていた。先生は如何なる時でも、必ず新らしい事柄や考え方を私の頭の中に注入してくれた。常に外国の新聞雑誌に目を通していられる先生の識見は、世界的のものであった。世界の環境における日本を常に見ていられた。

右翼といわれ乍らも、先生は決して偏狭な考えはもっていられなかった。世界における日本の地位、日本の役割、日本の使命等を正しく見ていられた。その識見と学識の下に世を啓蒙されていたと思う。そういう点から考えると、不勉強な政治家、頭の悪い評論家が日本にはあまりにも数が多く、困ったものだと先生は思っていられたのではないかと察せられる。

太平洋戦争勃発の前の事である。我々財界人としては、日米開戦を欲していない。政府はあらゆる手段を講じて日米開戦をさける努力をつづけている様に思われた。当時、私は三菱銀行名古屋支店長であったが、何とかして日米開戦だけはさけられるものと考えていた。

ある日私は上京した時に、西荻窪の先生の御宅に御伺いした。その時先生は着流しで庭に立っていられた。先生は私の顔を見るやいなや「いよいよ戦争です。色々話してきかせるからまあ上り給へ」といわれた。その時の先生のお顔は、いかにも悲痛な面持ちで、今もってその時の印象を忘れる事は出来ない。

日米戦争で日本に勝算のない事は、すでに先生は見通しておられた。そしてこれが回避のため、あらゆる努力を払われた様である。しかし軍部の圧力強く、すでに開戦の儀を決していて、これを阻止する事の出来ない段階に来て

いる。万事休すというお話であった。それから幾日か経って、真珠湾攻撃のラジオ放送があったのである。結末は予想通りでおわった。

非凡な天才を惜しむ

大東亜戦争の功罪得失は、今後百年の後に正しい判定が下されるのかも知れない。しかし、日本が政策としてえらんだ日支事変、日独防共協定、大東亜戦争等と切り離す事の出来ない此れ等一連の歴史的事実を見るならば、此の事が日本のとり得た唯一無二の賢明な道であったとは、どうしても考えられない。

生き残った我々日本国民として、なお将来繁栄をつづけて行かねばならぬ日本民族として、深く深く反省して見る必要がないであろうか。昔から哲学のない政治は政治でないといわれている。哲学者として、政治家として、政治評論家として、社会批評家として、超凡の生涯を終られた先生を回顧するに当り、呉々も残念至極に思われる事は此の非凡な先生の思想や経綸を取りあげて実行する程の政治家が、一人もいなかったという事である。

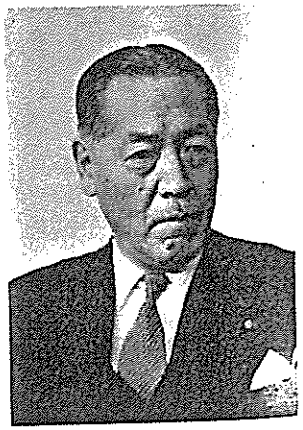
俗悪愚劣な日本の政治環境は、遂に先生を活用する事が出来ずに一生をおわらせてしまった。今日においてなお思想のない、哲学のない低次元な政治がつづけられている時もし先生が生きて健在であったならばと思う事が切である。

先生については、なお書きたい事が沢山あるが、紙面に限りもあるので、此のへんで筆をおきたいと思う。終りに改めて先生の瞑福を祈ります。

（三菱電機株式会社相談役、三菱経済研究所理事長、経団連経済協力委員長、同経済調査委員長）

博覧強記の人

星島二郎



私が始めて北さんを知ったのは、私の家が小石川にあった時、折悪しく不慮の火災のため焼け出されて、西高井戸の日本衣料統制株式会社の寮に入り、水道道路に面した所に住んでいた頃、北さんの家が近いということを知って、井荻の北邸を訪れたのが昭和十年頃であったように記憶している。

私が北さんを知ってから、他界されるまでに、もっとも強く印象に残った点は、一口にいうと、博覧強記すなわち多才、多能、多弁、多芸（美術、音楽絵画など）の特異な存在の人であったということである。

北さんが政治家として真骨頂を発揮したのは、昭和十五、六年以降に軍閥が政府を左右したいわゆる軍国時代に抵抗した時代であったと思う。

政党は軍部の圧力に押されて次第に影が薄くなり、日本の政治が議会政治を維持するか、あるいは、軍閥ファッショに変化するかの分岐点に立っていた頃である。

その頃の国民大衆は、一部の識者を除いて、軍閥の圧迫と言論の拘束のために、口を固く結んで語らず、政治に対しては全く傍観者の立場であった。

そして、軍部の横暴はますます激しくなり、政党政治を否認する大政翼賛会が発足した。この時、鳩山さん、北さん、尾崎行雄先生、原口初太郎さん、片山哲君と私達が翼賛会に反対して三十七名の同志と共に、赤坂山王ホテルの一室を借りて「同交会」を作ったが、その時の急先鋒に立

ったのが、北さんと川崎克さんであった。

昭和十七年四月の翼賛選挙はエライ干渉を蒙むり、「同交会」から立候補した多くの同志は、憲政史上稀れにみる大弾圧を受けて落選の憂目に会った。

その時、当選したのは、尾崎、鳩山、北、芦田、川崎、安藤（正純）、それに私を含めて七名に過ぎなかった。

私もひどい目に会い、応援弁士の昼弁当のご馳走で、主脳部全部が引っ張られ、尾崎先生は不敬罪の名によって起訴され、鳩山さんは演説会場において警察官から拘引をもって脅かされ、私もついに十日間刑務所につながれた。

当時は実に癪にさわってならなかったが、そのために終戦後にも追放令を免がれた。人間は何がその人を幸せにするかわからないと思ったが、北さんはわずかの当選組の論客の雄であった。

それから北さんのことについて思い出されることは、私達が終戦後、日本の再建を民主主義による立派な議会政治を行なわなければ、日本は救えないと考えて、鳩山さんを中心に新しい政党樹立を決意して、銀座の交詢社でしばしば会合を開き、その後、新党創立事務所を丸ノ内常盤に移して、盛んに討論した頃である。

この時の北さんは後に述べるが如く、大変な意気込みであった。

鳩山さんが私達の連絡により軽井沢の山荘を下りて来たのは、終戦一週間後の八月二十二日であった。この時、銀座の交詢社へ集った人達は、北吟吉、安藤正純、芦田均、植原悦二郎、牧野良三、矢野庄太郎、それに私であった。私達が日本の独立、復興には如何にすべきか、日夜、論議を重ねて想を練ったものであった。

それから、九月六日にいよいよ丸の内常盤に新党創立事務所を設けることになった。この事務所に集った顔触れは、北、安藤、植原、芦田、牧野、矢野、河野の外に、楢橋渡、斎藤隆夫、川崎克、一宮房次郎、柴安新九郎等旧民政党の諸君も同席したが、斎藤、川崎、一宮君等は従来の政治的背景が異なるということで、ついに私達の新党には不参加ときまった。

私達は従来の政党の弊を除き、新鮮な立派な政党を作り、民主主義と自由経済をもって国政の大本とすることに重点をおき、評論家、学者、さらに実業家などの優秀な人

材をも入党させて、従来の経験豊かな政治家と論議の上、政策や党則の決定を行うことにしたのである。十月七日に至ってようやく新党創立準備懇談会を開くに至った。この日は党名、党則、宣言、政策、綱領等について懇談しが、一たび北さんが口を開くと、しだいに熱を帯びて口角泡を飛ばして演説口調になってしまう。誰かが北さんに質問すると、欧米の政治家や学者や評論家の名がとび出し、その上、西歴何年にはどうだとか、欧米の政党の歴史とか、近代民主政治興亡の推移などの話が出て、聞いていると誠に面白い。

つぎの日に懇談会を開くとまた、北さんが立って喋りまくる。河野一郎君などは「俺は北さんの演説を聞きにきたのではない」といって席を立ってしまったこともあり、どうしても本論の政策、綱領などが決らない。

こうした日が幾日も続いたが、北さんの述べることが、あれは「ホラ」ではないかという人もいたが話の内容が昨日と今日とが全く違がい、今日と明日の話題がまた異なるので、私は北さんという人は経歴の示す通りの学者肌の人であるとつくづく思った。あの人の博覧強記はまさに天才である。北さんの多能、多弁が長所であり、また短所でもある。

北さんがいくどか閣僚候補に推されながらも、一回もその経験がないというのは、あの人の多弁の故である。人格高邁な北さんを偲んで、その才幹を用いられることなく、この世を去られたことは、友人の一人として誠に痛惜に堪えない。

誰か後世において憲政史を綴る者は、必らずや北さんの名を書きとどめるであらう。私は無量の感慨をもって思い出を綴り、在天の北さんの霊に捧げたいと思う。

（元衆議院議長
元国務大臣
現衆議院議員）

私学振興の恩人

大浜信泉

印象に残った先生の講義

北昤吉先生の想い出を語るとなると、先生が早稲田大学の教壇に立っておられた頃のことにふれないわけにはいかない。私自身、先生の直接の教え子の一人だからである。

先生には、法学部一年生のとき、心理学を教わった。あのころ先生は三十三、四才の少壮教授であられたわけだが天性の美男子の上に、当時の早稲田には珍しいスマートな颯爽たる姿が印象的であった。

心理学といえばその内容は地味なはずだが、先生の雄弁というより熱弁によって若き血を湧きたてさせられて、眠気を催すようなことはなかった。ヴントその他、外国の学者の名が次から次へと出て来たことが、深く印象に残っている。

先生の専攻の関係もあって、心理学の講義が、いつとはなしに哲学の方へそれてしまうことがよくあった。学ぶ方からすれば、心理学と哲学とを併せ学んだようなもので、得をした方かも知れない。

学校の講義は、とうとうたる雄弁よりは、サザエをかむようなゴツゴツした訥弁の方が効果的だ、といわれている。訥弁の講義は聞いていて心よいものではないが、一言一言かみくだいて受取るように余儀なくされるので、かえって頭に残るのである。それに引きかえ、雄弁か熱弁家のごとく水を流すような名調子の講義は、その調子に呑まれ陶然として頭を素通りしてしまって、後に残るものがすくない。

文部大臣を期待した

鳩山内閣が成立した二、三日前のこと、組閣参謀と目すべき政界の某実力者から、今度の内閣には、北先生が文部大臣として入閣されることはまちがいない、と聞かされて大いに楽みに期待していたところ、発表された閣員名簿には北先生の名前がなかった。先生が辞退されたのか、それとも椅子の割振りの都合でそうなったのか、事情は知らないが、そのときほどがっかりしたことはなかった。

先生には、私学法その他いわゆる私学三法の制定の際、私学のために大いに骨を折ってもらった。北先生のような私学の味方が文部大臣になられることを、私学関係者は待望していたのである。国立出の政治家にも、私学の理解者、私学の同情者がないわけではない。しかし頭で理解するのと、肌をもって体験するのとでは、格段の相違がある。私学出でなければ、ほんとうに私学のことはわかってもらえないものだと、つくづく思うことがある。

何がきっかけになったのか、記憶がさだかでないが、とにかく超党派で早稲田出身の国会議員の方々を、大隈会館に招いたことがあった。三木武吉老も列席されたが、その席上二、三の代議士諸君から、入学試験の際、国会議員の推薦した受験生に対しては、特別の考慮をして欲しいとの発言があった。校友の集りには、よく持ち出される提案であるが、その会合でも、ほとんど全員が拍手で右の提案に賛同された形になった。ところが北先生がやおら立たれて「今の発言には私は絶対反対だ。学校は学問をするところだから、学力の優秀なものを入れるべきで、縁故で入学を決定することは大学の堕落である。多くの諸君の発言に耳をかすことなく、大学は既定方針で進んで欲しい」と力強く断言された。この断呼たる発言によって、私は弁明を要せずしてその場を救われたが、この発言は、先生のある面を語る一挿話ということができよう。政界に身を投ぜられても、大学教授としての心情や良心は、決して濁ることはなかったものといえる。

（早稲田大学総長）

北先生の追憶断片

赤松保羅

先生との不思議な宿命

北畠吉先生が亡くなられて、今年三周忌を迎え、先生を追慕する小冊子を発刊するに当り、旧知の稲辺小二郎君から自分にも何か想い出を書くようにと求められた。

大正二年の頃、先生が土浦の中学から抜擢されて早稲田大学の講師に赴任されたばかりの時、自分達のクラスが恐らく最初の学生として教えを受けたのが、そもそも先生と自分との交渉の初めであった。

早大予科の時、先生からヴントの心理学入門を、大学々部の時は同じくヴントの心理学概論と、そのほかに哲学概論の講義を拝聴した。当時、大学の教壇に初めて立たれた先生はまだ若く、研究心は極めて旺盛で、充分準備された講義は明快闊達でしかも情熱に溢れていたので、学生には深い感銘と敬慕の念を与えた。

此の頃、先生の早稲田での研究と教授は、先生にとっても華やかな想い出の深い愉快な生活であったであろうと想像される。また、哲学科の教員と学生によって組織された「早稲田大学哲学会」においても、先生は当時の若い教員中の指導的役割を自ら進んで引受けられ、従来余り振わなかった哲学会を、本来の有意義な、内容的にも活潑な会に復興再建された事実は忘れてはならぬと思う。

後年、自分が早大で心理学の講義を担当するようになったことは、ヴントの心理学とはその学説と立場の相違があるとしても、当時の先生から受けた心理学の講義の影響と全く無縁とは言われぬと思う。また、自分も在職中に早大の「哲学会」と永い間、深い関係をもつようになったことも、共に先生との不思議な宿命のように思われる。

ニューヨークでのエピソード

大正六年に、天野学長と高田前学長との関係者の間に起った、所謂「早稲田騒動」のあった時、北先生は改革派陣営に立ったためか、ついに大正七年に早大を退職されて、間もなく四年余の欧米の遊学の途に上られた。先生は初めアメリカに留学されたが、ハーバード大学に行かれる前にニューヨークにしばらく滞在することになった。当時、自分は地方の大学からニューヨークに移って、コロンビア大学で研究中であったので、先生の宿舎が定まるまで、自分の借りていたアパートの一室に先生と二人で数日を同宿することになった。

先生のとくにご希望で、当時知名な左傾的社会科学者達の教授する、一時学界の評判になった、特色ある社会科学研究の新設大学なども案内した。各所を見学視察したある日、コロンビア大学に程近いハドソン河畔の芝生の上で、先生は何を感じてか急に胡座（あぐら）をかいて瞑目し、法華経だか般若経だかを、歩道の行人にかなり聞かれる程の高声で御経を唱え出した。これには自分もいささか驚いたが、何事かとわれわれを振向いて行く三々五々の人々に自分は微笑をもって答える風をした。

また、ある晩、比較的高級なレストラントで、先生から晩餐の御馳走になったが、先生はあたりの客人に構わず、二人の会話には不必要な大声でおしゃべりをするので、異邦人の無作法者と思われてか、われわれ二人は、テーブルの近辺の者から怪訝な顔をして見られた。自分は少しも恥かしいとは思わなかったが、なんだか、くすぐったい感じがした。

これは先生が無作法とか粗野とかではなくて、外国に来ていても、一日本人としての誇りとまた学者としての自信からのことで、オーバーに言えば傍若無人だが、しかしそれは高慢でなく、無邪気な先生の淡泊な性格の一面の現わ

れとも言えようか。

成蹊学園への抱負を語られる

先生が欧州に向ってニューヨークを去られる数日前に、多分大正七年十一月の末頃、自分の宿舎に訪ねて来られ、先生の外遊中の今後の研究と帰朝後の将来の方針などについて、色々とシンミリとした話をされたことがあった。

その話の中で、先生が三菱の岩崎家から弐万円？ の厚意ある援助を受けているが、今後ハーバード大学、欧州は英国を初めドイツ、フランス、スイス、イタリー等に留学あるいは視察をすることについて、種々とそれらの計画を詳しく話された。

また帰朝後については、現在岩崎家が経営の出資をしている吉祥寺にある成蹊学園は、今の所高等学校の課程までであるが、先生としては将来大学にまで昇格させる希望と計画をもっている。最初は先ず学部として政治経済学部から始めるが、次いで文学部系統から追々と拡充発展させて行き度いと思う。ついては、大学部新設の場合は、初めの中は君の専門とは研究上直接のつながりはないが、君も帰朝後は成蹊の教授にならないかという有難い話もあった。

その時、先生は早稲田大学のように、すでに所謂伝統のある大学は、それだけに自然とある程度の歴史的制約を受けるから、既設の大学よりも将来発展性のある新設の大学の方が、むしろ多くの希望が持てるのではないかとも附言された。

前段の話の事は、あるいは成蹊学園または岩崎家から先生に委嘱のあってのことか、あるいはそれとは別に、単なる先生自身の主観的な個人的希望と計画であったものか、その辺の事情は自分にはよく判らなかった。その時自分は先生の御厚意に対しては衷心から感謝はしていたが、折角の先生の推薦にも拘らず、まことに不本意ながら、何も約束は申上げなかった。

ハイデルベルヒの想い出

それから二年余の後、自分も欧州に渡ったが、先生は英国の諸大学を見学視察の後、ドイツはベルリン大学に一年

余在学されたが、哲学の研究にあまりなさらず、ベルリンの郊外に居を卜されて、専ら大戦後、敗残のドイツの政治、経済の混乱した悲惨なる社会状勢を、先生の政治哲学者の態度で精密に分析観察されたようであった。

自分がドイツに行った時は、先生はすでにベルリンからリッケルト教授のいるハイデルベルヒ大学に移っておられた。その前自分が英国に滞在中、先生がドイツで少し健康を害していると聞いていたので、大陸は先ずフランス行を先きにする初めの計画を変更して、英国から先生のおられるハイデルベルヒに直行した。

ハイデルベルヒに着いてみると、先生は意外にも病後とも思えぬ程に、かつての以前にも増して非常にお元気で、アメリカ以来の再会を悦んで迎えて下さった。先生は自分を大学の学内各所の見学案内は勿論のこと、時には彼の特に近世哲学史で高名な故ヴインデルバント教授が屢々散策したという「哲学者の道」を、先生と一緒に歩きながら、先生からドイツ哲学界の現況についての御高説や、先生御自身の同大学における研究問題等について、詳しく聞くことが出来たが、また、大変に教えられることが多かった。

また、ある時は、詩人フニルスターの「アルト・ハイデルベルヒ」で有名なハイデルベルヒの古城、またある日は遠くネッカー、ゲミュンドまで出掛けて、眺めの美しい河岸の料亭でギリシャの赤葡萄酒などの御馳走、また屢々風光明媚で、ドイツでは珍らしく東洋的景観を思わせるネッカー河の渓谷のあたりに、度々連れて行って頂いた。

自分のハイデルベルヒの滞在は十数日にすぎなかったが先生の旧に変らぬ温情には、今日想い出しても感謝の至りで、言葉に尽くせぬものがある。

先生は第一次世界大戦後、唯一の最初の留学生としてハイデルベルヒ大学に行かれたが、その後引続き二年余にわたる先生の研究生活は、恐らく先生の生涯において一番充実した、また最も先生に満足を与えた愉しい人生の一駒であったと思われる。

その間の一例を挙げると、リッケルト教授のゼミナールにおいて、先生が「日本の神秘主義について」と題して講演された時、リッケルト教授を初め列席者一同から多大の好評を受けたということであるが、先生がこれを甚だ得意として、他の人にも度々語られたそうである。

政治家としての先生を偲ぶ

北先生は欧米の留学から帰朝後は、自分達の想像と予期に反して、学界の研究生活には這入られず、その後晩年に至るまで周知のように政界で御活動になられた。先生の御住居は、御逝去に至るまで永く中央沿線の西荻窪であったが、自分も同じ西荻窪に、現在の鎌倉に移住するまで二十余年を過ごしたのであったが、互いに仕事の方面を異にした関係で、度々は御目にかかる機会はなかった。

たまに電車の中などで御逢いすることがあると、政界で重きをなす先生は、色々と当時の日本の実際政治について、例によって情熱をこめて語られ、その談論風発の御話は先生の政界における実力と自信の程を想像するのに充分であった。

晩年、先生が政界から隠退されて後、ある日使者を自分の家につかわされ、ヘフディングの近世哲学史二巻を借用したいと申出があり、同時に先生からも電話で「今少し閑暇であるから、前の同書の邦訳を改訂したいから」ということであった。此の意義ある立派なお仕事も、不幸にして先生の健康がすぐれぬために、ついに実現出来なかったことは、先生御自身にとってもまことに遺憾のことであった。

ある夜更けに、西荻窪駅に近い街頭で、先生の酔歩漫々たる姿をお見かけしたことがあったが、その時先生は、近く国会図書館の館長になるかも知れん、という嬉しい話をされた。先生の如き才智共に豊かな天寮の人を、先生の真の才能に応ずる適材適所に用いることを、若し世の人が知らなかったとすれば、実際は勿論、先生は現実にも常人の及ばぬすぐれた生涯を立派に終えられたのであったが、それは実に学界および政界の無智と無能にその責があると言わねばならぬ。

先生逝きて亡き今日、先生の在りし日の俤を偲んで、まことに愛惜と追慕の情の切なるものがある。これ唯だ自分一人のみではない。

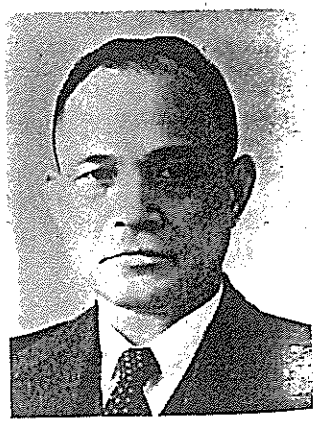
（早稲田大学名誉教授）

想い出のところどころ

加藤清二郎

北吟吉先生と私の交際は昭和十年、北先生五十歳、私が三十七歳（創業十一年、三十一番目の店、新宿聚楽開店の翌年）の頃に始まり、年とともに親密の度を加え、先生の生涯続いた。もっとも私は、先生の人柄が大好きであり、尊敬をし、求むるところなく純粋のファンとして応援させて頂いた。先生も私のことを好きであり、歳は十三ちがったが、二人はなかなか仲好しであった。二十六年の親交であるから、想い出といっても、数限りなくあるが、紙数の制限もあるので、ところどころを語ろう。

先生は天才的な弁舌家



先生は佐渡ヶ島の名門の出であり、幼にして神童の誉れ高かったと聞いているが、長いつきあいの上から、まさにそうであったろうと思われる。

昭和二十二年の夏、長野に行く汽車の中で、鳩山一郎先生にはじめてお会いして、名刺を出したら、鳩山先生は「北君から屢々聞いて、君のことはよく知っています。まあおかけなさい」ということで、三時間ほどお話ししたことがある。

そのときに、先生は「北君は、十五時間でも二十時間でも独演して尽くることを知らない。そしてその中で、同じことは言わない。その強記博覧、驚くべき天才である」と激賞しておられた。また、某有名人は私に「北さんが神戸

から汽車に乗って青森に着き、青森からそのまま引返して神戸に着いたが、未だその弁舌は終っておらなかった」と語られたことがある。

実にその通りで、北先生の元気盛んなりし頃、何か用事があって、先生にそれを伝えようと思っても、滔々と雄弁が続いて、全く幕間がないために、話を切り出すに困ったことが屢々であった。

その様なことで、鳩山先生に御懇意に願い、選挙の応援をさせて頂いた。

北後援会々長を断わる

あるとき、北先生が来訪され、北後援会を作りたい。ついては加藤さん、後援会長になってもらいたい、というお話があった。

これに対し私は、私の様なものをさほどに思って頂くのは有難いが、大島秀一君が昔からの友人であるから、大島君に義理が悪いから勘弁して頂きたい。しかし、ちゃんと応援は致しますからと御返事した。先生は、困った、困った、と言って帰られた。

それから二週間くらい後に、また来られて、名誉会長を鳩山先生に願ったから、ぜひ加藤さんに会長を引き受けてもらいたい、とお話があった。これに対し私は、非常に名誉のことで、感激にたえないが、大島君に対し、あまり露骨になって義理が悪いから、平に勘弁してもらいたい、と重ねてお断りした。先生に頼まれたことは、たいてい引き受けてきた私は、この時ばかりは、純情の先生の一生懸命のお話をお断りすることが、大変苦しかったことを覚えている。

鈴木大将、北先生、羽黒山と私

鈴木荘六大将、北先生、元横綱羽黒山と私、この四人の想い出話をしよう。

昭和十二年頃であったと思う。元羽黒山が入幕したときに私に後援会長をという話があったが、私は辞退して、新潟県として初めて出すことになるであろう大関、横綱になる可能性のある元羽黒山のために、大後援会を作ってやろ

うと考え、鈴木荘六大将を会長にお願いし、大倉男爵、芳沢謙吉氏を副会長に願い、当時在京の県人の名士多数の方々に役員に就任して頂いた。当時の衆議院議員北先生にも常任理事をお願いした。後援会は私が理事長として運営に当った。

この後援会の会合に、一回も欠席なく、必ず出席されるのが、会長の鈴木大将と常任理事の北代議士であり、演説は私の前座で、鈴木大将の挨拶、北先生の演説の順であった。鈴木大将の重厚な軍人調の激励の挨拶と、北先生の熱血火を吐く様な雄弁の辞、これが元羽黒山後援会の盛んなりし頃の名物であった。

四人顔を揃えて、かなり多く酒の席があったが、その頃の鈴木大将は酒豪であり、北先生もまた、斗酒を辞さぬ酒豪で、羽黒山は酒はたいして飲まなかったし、私もいける方でないので、その点いつも閉口したものであった。

口の悪い北先生も、鈴木大将を心から尊敬しておられた。わが越後が生んだ上杉謙信以来の、誇るに足る名将である、と常に私に話しておられた。北先生の母堂が死去されて、告別式に鈴木大将が弔問に行かれた。そのことを非常に喜んでおられた。

先生は、人の親切、厚意、友情等を素直に汲みとって、子供の様に喜んで感謝する無垢純情な人であり、少年のような無邪気さのある人であった。その様な場面に数多く会っており、また、私は北先生のその様な面が、たまらなく好きであった。

参議院立候補をすすめられる

昭和二十二、三年頃であったと思う。北先生が来訪され、突然申されるには「参議院の選挙に立候補しなさい。あんたが出て、金を〇〇〇円くらい使い、一月間演説すれば、われわれが全面的に応援するから、置いたものを取る様に確実に当選するから、ぜひ出馬しなさい」先生は真剣な、熱心な、あたかも命令するようなえらい剣幕で、私に参議院の立候補を勧められた。

私は先生の私に対する、かほどまでの信頼と友情に対し心から感激したが、かねがね、実業家が政治に関係するのは邪道であり、従って先輩や友人に勧められても、政治に

関係してはならぬという考えを持っていたので、そのことを語り、先生の厚意を心から謝し、辞退したが、先生は残念そうに、なおも熱心に勧められた。

北先生は余程私を参議院に出したかったとみえ、あの物ごとに余り執着のない、淡々とした先生が、五回も六回も根気よく度重ねて私を来訪され、熱心に口説かれた。私は先生の私に対する友情に対し、すまない、すまないと思いながら断わり通した。

この問題は、先生と私の長いつきあいの中の一つの情熱のこもった場面であるので、長く私の記憶に止まるところである。

（大日本食堂株式会社社長、新潟県人会副会長）

北昤吉先生の半生をおもう

波岡信之

一輝先生の建碑式当日を回顧

いま先生の事にふれて何かを書きたいと、原稿を前にして眼を閉じれば、一輝、昤吉、昌の三兄弟が私の脳裏を走る去る。

『歴史は北一輝君を革命家として伝えるであろう。しかし革命とは順逆不二の法門その理論は不立文字なり』と云々――。碑文は故大川周明博士の撰である。昭和卅三年八月十九日、目黒不動尊滝泉寺において、故北一輝先生の建碑式が挙行された。暑い日であった。私は、昤吉先生御夫妻と御家族に随伴列席した。

『かくして北君は生前も死後も一貫して正に不朽であろう』と碑文の最後を読み終った時、静かに目を閉じれば、丁度二十一年前の今月今日の朝、代々木の刑場から北、西田御両氏の丁重に収められた遺体を桐ヶ谷の火葬場に運びいささかも苦悩のない、ほのかに化粧された一輝先生の顔に最後のお別れをしてから、その二つの遺骨を捧持して中野桃園町の北邸に奉安した当時の様相が、走馬燈の様に浮ぶ。

式が進むにつれ、佐渡から菩提寺の浜松住職と共に上京された御老母が、昨日の様に頭に浮ぶ。八十余歳の御母堂を中心に、昤吉先生、住職、八田三喜先生（昤吉先生の恩師）と私と五人で語った時の、お母様の仏様のようなやさ

しい顔。一輝先生と最後のお別れの時の顔。そして今目前にある聆吉先生の顔……。何か一貫したものが強く私の胸を打った。

おそらくこの日は聆吉先生の生涯を通じて、至高至大の喜びの日でもあったのではないかと私は思う。

頭山満、内田良平両翁を始め、公爵近衛文麿、久原房之助、秋山定輔、萱野長知、永井柳太郎、大川周明、中野正剛、佐々木武行、岩田富美夫、清水行之助、松岡洋右、鳩山一郎、安部磯雄、大野伴睦、喜多荘一郎、星島二郎、大久保留次郎、麻生久、浅沼稲次郎、田原春次、三宅正一、中村高一、稲村隆一の諸先生、徳川義親元侯爵並に財界では切っても切れぬ三菱の岡野保次郎氏、高杉晋一氏、実業家加藤清二郎氏、美術界では平福百穂、山口蓬春、牧野虎雄、杉浦非水画伯、井上欣治、村田晴彦、加藤好正氏等が去来した。これら諸先生のどの一つを書いてみても、十枚や二十枚の原稿紙には書ききれない。

聆吉先生の滔々懸河の雄弁も、荒木大将や松岡先生には一目おかれていた。悲憤慷慨して涙を流して語られたのは中野正剛先生の事である。頭山先生宛の遺書と、書置きの次第等々、それら火をはく舌端には吾々も共に泣いた。

『護国頭山先生』と表書きした封筒に収め、仏壇に入れた。昭和十八年十月二十六日、憲兵隊より帰宅した自決当夜の唯一の遺書である。この頭山先生宛の唯一の遺書の事と、自決直前の態度と心境を四枚の原稿用紙にしたためた書置きの事と、刄止めした美濃の国、関兼定の銘刀で『仏壇の書置き、人手に渡すな。頭山先生に頼む。刀の切先が丸くて切れそうにない。時計の側でネタ刄を合わせたが駄目、そこで腹の方は軽くまねがたにして、仕損じぬようにやる。東向九拝、平静にして余裕綽々、自笑儂は、日本を見ながら成仏する。悲しんで下さるな。断十二時』とここまで一息に語られた聆吉先生。さながら北か中野か、中野か北か、本当に中野先生が再来したかの様に思えた。かくして中野君は自爆した。云云

忘れられぬ聆吉先生の姿

昭和七年四月アメリカにいた時、ほとんど毎日顔を合わせて行動を共に過した数々。殊にロスアンゼルス、ツリニ

ティーホールの大山郁夫、北聆吉両先生の立会演説（大山氏の演説は当時内地では弁士中止で満足にきけない）は、大変な盛会であった。三十分ずつ、さらに三十分ずつで二回、最後に十五分ずつ、遂に最後の大山先生の――。演説には聴衆が五分間も聴かず立って仕舞った。北先生の人気は白熱的であった。その他アメリカ関係の数々。

昭和九年四月内田良平翁を熱海の病床に見舞われた時、国内の諸問題、外交、政治、文化、日米、日ソ関係から日支問題、第一革命から孫文、黄興、蔣介石、毛沢東、北一輝、大川周明を語られた三時間余、息ずまる光景は今尚脳裡にあり、また、度々の選挙のことや令兄一輝先生が二・二六事件に連座せられた当時、日夜神経をすりへらして、この時代の嵐に対応したときの感懐。敗戦後鳩山一郎先生と自由党を組織し、その政務調査会長として鳩山、三木、芦田、平塚、河野、星島、大野、林先生等と敗戦日本の収拾策に奔走奔命した。聆吉先生の姿が、いまなお生き生きとして私の心のなかに深くきざまれている。

先生の政治は哲学を根基とした所に強さがあった。その憲法問題に至っては、帝国議会即ち九十二議会の憲法調査会の白眉である。今その議事録を読み、いまさらながらその慧眼に頭が下がる。松本丞治、金森徳次郎、芦田均の諸氏以上に明哲な判断と周密な論理で、それは構成されている。むろんそれは、大日本帝国憲法の起草委員であった。ただ一人の生存者、伯爵金子堅太郎八十六翁の葉山邸に屢々往来（昭和十年頃）され、さらに尾崎行雄、大竹貫一、望月圭介先生等と意見を交された事にも起因するであろう。

この頃の先生と私は昼夜の別も無く過した。其の間今日の多摩美術大学を創設され、美術を語り、音学を楽しみ、芸術を愛し、酒は和洋清濁辞することなく飲まれた。遂に天運この素晴しき天才児に味方せず、経国の大志をいだいて人も知る滔々懸河の雄弁もさらりと捨て去り、『雄弁は銀、沈黙は金』スフインクスの如く黙々として多くを語ろうとしなかった晩年の枯淡な種々相々。その頃から数年の後さしものこの稀代の天才児も、早この現世になん等の未練もなきが如く、俗世の暑熱焼くが如き昭和三十六年八月五日、盟友大野伴睦先生を枕頭にして、涼風諷々の世ならぬ黄泉の国に旅立たれて仕舞った。この間聆吉先生の半

生涯と密に結ぶ御縁をえた私の半生涯も写し出される。

さて、いざ想い出を浮き彫りにしてみようと思うと、余りにも近かったため、かえって手がつけられぬ。こんな気持は誰にも体験があろうと思えるが、二、三の想い出を、先生のお姿の内と外においてみつめてみよう。

直情径行、才気縦横時代の横顔

佐渡、郷里の新潟第一区から総選挙に無所属で出馬し、首尾よく当選、祝盃も充分に挙げえず、疲れて共に東京に帰ったのが、昭和十一年二月廿五日夜であった。

その夜はなま温い感じで外はしんしんと静かに更けた。北先生を国会におくろうと必死に弁論戦を斗いぬいた。疲労も当選の嬉びで心地よい眠りについた。朝突然枕元の電話が鳴りひびいた。二・二六事件大雪の朝である。

まだ外はうすあかり、寝床にどっかとあぐらをかき、両腕を組んで沈思黙考している私ともとに、次々と情報が入る。私の脳裏をなにかしら掻きむしる様な予感があった。それからの私の軀はキリキリ舞いの仕通しであった。その朝大行社清水行之助会長（一輝先生上海にて「国家改造法案原理大綱」言語に絶する苦悶の間に脱稿、此の間岩田富美夫氏と共に座右にあり、後大川博士の昭和六年三月、即ち三月事件の立役者、当時二十万円を博士に提供、現在に換算約一億）、貴族院議員徳川義親侯爵（虎狩、象狩の殿様。清水氏の懇請により、大川博士に軍資金として五拾万円を贈る。現在に換算二億五千万余。故に博士は軍資金に事欠かなかった。敗戦直後、世界恒久平和研究所に五十万円提供、これが日本社会党の前身）、立花良介先生（支那革命の参加者、後実業家）の名で借りた山王ホテルに参集会合となり、次いで大川邸に移り協議。更に次いで藤田勇邸の会合となり、頭山邸、内田邸、北聆吉邸、石原広一郎邸、銀座の私の宅、丸の内ホテル、徳川生物学研究所等々目まぐるしい一日だった。翌二十七日も同じ否、もっとせわしさが繰返された。

北一輝先生の身を案ずるささきやが、色々な同志の線から蜘蛛の巣のように張り渡ったが、この動乱のさ中では、すべて空しき協議となった。しかしこの目まぐるしき間に私の耳朶へ強く残った対照的な二つの声がある。それは大川先生が山王ホテルの会談で『この青年将校の一団を主謀とする軍人の蹶起を、何んとかして成功をさせたい』という事であった。だが聆吉先生は代議士として、私の家の会合で『この蹶起の真相をもっと適確に分析しなければならぬが、新聞の紙上にも表われているが如く、宮中よりの見解が、叛徒という立場にあるものならば、—陛下の御意志がここにあるならば—、一君万民、皇后陛下といえども家来である。断乎として討たなければならぬ。香椎戒厳司令官は何をして居る』という強い見解に立っていた。直情径行、才気縦横、この人の特質で、特にこの頃の実兄一輝先生との思考における相違点とも思えぬでもない。しかし、この問題で次の点をハッキリと付け加えておられた。

『それは兄—一輝は恐らく直接にこの軍事行動を指揮している様な事はあるまい。だが、兄の思想的な影響をうけた誰かが指導している事はあり得る』という事であった。この点は、遇然にも大川周明説と殆んど一致していた。

この事件の処理後、つまり一輝先生も共に銃殺の刑に処せられた一切の情況判断からしても、私の見解は、やっぱり聆吉、周明両先生の判断と別なものは生まれない。であるとすれば、なぜ一輝先生と西田君が共に地上から消されるに至ったか、という問題である。

これは政党政治の堕落に伴ない決起した怪勢力つまり軍人の怒りの集団に便乗した怪勢力の時代史に秘められた、永遠の悲劇的なナゾであろう。

ジレンマに苦しむ聆吉先生

その直後この事件をめぐって、国会では軍部大臣と衆議院議員との間には血闘にも近い論戦がくりひろげられた。なにしおう武力を背景にし、憲兵の威力をひかえた軍部には、丸腰の政治家はいうにいわれぬ不安と苦脳があった。

たまたまある席上で、中野正剛氏が北聆吉氏に向って直言したものに『北君！君はなぜ、自分は一輝の弟である、と、堂々政府に迫らんのか』と無二無三に激しく直言した。この時の聆吉先生の面上には、非常に苦しいジレンマの色がうかがわれた。そしてこの問答に無言でもって対応したとはいえ、その心情は私にはよく窺えた。

これをここで言葉にかえてみれば、つまり『中野君、君

の親切はよくわかる。また君の政治家としての勧告もよくわかる。しかし大義名分とは別に、一輝と俺はどこまでも兄弟だ。つまり国会議事堂にたとえいかなる理由があろうとも、一片の私情をはさんだとの非難がのこれば、議場を冒瀆すると共に、兄一輝もああいう男だから、決して俺を許すまい』というところであったろう。

この日はこれで過ぎたが、その直後国会で、寺内陸軍大臣に肉迫した代議士、浜田国松老を大声で叱呼し、激励し演壇より降りた浜田代議士を、さらに壇上に押上げ、遂に有名な浜田代議士と寺内陸軍大臣との腹切り問答となった。発端は、実に中野正剛氏への無言の対応がここに顕現されたものとおもう。公私の別のきびしかった氏の面目が躍如としていよう。

天才惜しむらくは時を得ず

先生が『人心一転の途』に述べた天才論は、その筆勢は破竹の勢ともいうべきか、学識の奔流するに任せて留まる所を知らず、というべきか、いずれにせよ天下の大文章である。ところが恰かもこの文が、自らの運命を説破して余すところがないまでに書かれている。

ドイツの哲学者ベルグマンの『人は社会においてのみ人となる』から説き起し、千里を走る大奔流の如き名文、その結語は、いかなる天才といえども、特殊な環境を与えない限り、その天来の資質を充分に発揮し、広く時代を救うことは出来ぬと指摘されている。天才と人生と時代、この三つの結合に論評のツボをおかれたものと私は拝読した次第である。

一輝、聆吉、昌（仙人の様な人）の北家三人の天才兄弟は、それぞれの天才型を完全に備えた。それぞれ偉材ぞろいであった。私の知る限りにおいて、先生は一生一度の登竜門を居眠りしてくぐりそこなったかの感が深い。しかしそれが却って先生の生活を清らかなものにし淡々とした後半生を過されることになったのかも知れぬ。

なお、先生の友愛の強いことは多くの話材があり、在米中より親しいアメリカの頭山翁と云われた人傑――土佐の佐々木武行翁との白雪の如き清らかな交わりの中に、昭和十二年、佐々木翁の招宴で聆吉先生と周明博士の初めての

会見は、実に語りても語りても話はつきなかった。上海での大川周明、北一輝両先生の会談もかくやと思われた。祖国の行末を憂えての血のかよう愛国者同志の情々愛々は、その代表的なものであろう。ここに多くの文字を投じて記述すべき価値を充分認める次第であるが、紙副も尽きたので擱筆する。

（元参議院議員・元厚生政務次官）

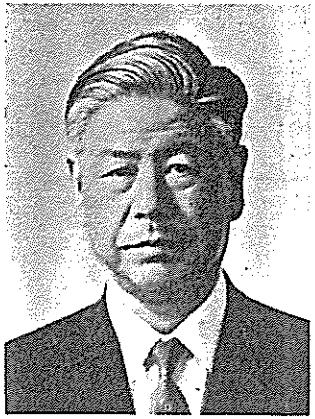
先生と選挙戦を偲ぶ

村田晴彦

立候補決意まで

昭和四年普選第一回の選挙に先生は、郷里佐渡から立候補して山本悌二郎氏と一騎討ちをやると言い出し、友人知己を荻窪の自邸に呼び集めたが、井上忻治、大峡秀栄の両氏を始め殆んどの人達は立候補に反対した。

しかし、先生は誰の言うことも聞かない。止むを得ず私は新潟へ電話して、八田三喜先生に上京して貰うことにした。八田先生の反対と一輝先生からの使いの者によって、ようやく立候補を阻止することが出来たが、翌五年の第二回普選には、東京から中立で立候補を宣言してしまった。



私は、伊豆大島まで四五人と組んで出掛けたが、この選挙は惨敗であった。

越えて昭和十一年の正月の元日、年賀に荻窪の自宅へ伺うと、先生は「こん度の総選挙にぜひ新潟県第一区から立候補したい」と言い出した。新潟市、佐渡郡、西蒲原郡、と一市二郡が選挙区となっている新潟第一区での選挙で、当選十三回の田辺熊一、当選十一回の山本悌二郎、当選九回の松井郡治氏等の金城湯池といわれた選挙区であった。

佐渡は先生の郷里ではあるが、もう二十年も帰ったことがないと言うことであり、新潟、西蒲原には数年前夏季大学で講師として行った時の二、三の小学校長に知己があるだけだと言う。いかに先生が言論に自信があるとは言え、

言論戦だけではすでに東京での選挙で経験済みのことだ。しかるに、先生は四日の夜行で新潟へ選挙情勢を見に行こうという。私もほとほと困り果ててしまった。

先生は常に哲人政治を説き、自ら政界浄化のため哲学者として政界に出たい。そして、いまの政治家の持っていない新鮮な政治意識を政界に吹き込んで見たい、と云っておられた。五日、六日と、新潟市と巻町で二、三の校長さん達に会っては見たが、選挙のことはとんと判断がつかない。

そこで、先生には東京へ帰って貰い、私は単身佐渡へ渡った。小木の塚原徹氏（小木町長、佐渡民政党幹部。早大哲学科出身の傑物）を説き、二人で大雪の中を両津の松瀬教五郎氏（歯科医、前県議、民政党幹部で、この選挙で事務長となり、選挙違反に問われて六十日間未決で苦しまれた人格者で高潔な人）を訪ねた。

頑固な土屋翁も支持

松瀬、塚原両氏と共に、いよいよ佐渡政界の元老で、二十数年間両津町長の現職にあり、且つ県会議員を兼ねている土屋六右衛門氏を口説くことになった。

土屋翁曰く「北君にはまだ会ったこともないが、彼は、松岡洋右君と一緒に政党解消運動をやった人ではないか。そんな人を政党人である俺がどうして助けられる。それに北君の父親は北六左衛門と言って、俺の政敵（政友会）だった。しかも、二人は越佐航路で大喧嘩をして双方がお客をただで乗せて、おまけに手拭を一本宛出して競争をやり、お互にしんしょうをすった間柄だ。その俺が、いま敵の息子の軍門に降れるか」とえらい権幕で、なかなか聞き入れそうもない。

私はこれに反問して「永い間、山悌さん一人に名をなさしめて、これに対抗出来ない佐渡の民政党は情けないではありませんか。敵の息子でもなんでも助けを求めて来た者に助けを与えて、山悌さんに一矢を報いるのが政党人の意気ではありませんか。また政党解消運動は一つの政治活動であって、その実体はやはり一つの政党ですよ」と言ったら、頑固一徹の土屋翁「よし引受けた。俺を北君に会わせろ」と言うことになり、一月十四日に土屋翁は上京され、

荻窪の北邸へ案内した。

そして、民政系中立と言うことで先生の立候補の話は決った。この時、土屋翁は新潟ですでに野沢卯一翁（元県議元代議士、県民政党最元老県支部長）や西蒲原郡の伊藤栄一県議との間に、先生擁立についての諒解をとりつけて来ておられた。

この選挙は二月二十一日の開票で楽勝したが、西蒲原郡と佐渡で数百名の選挙違反を出し、折角当選した先生も事務長が違反に問われたので、連座規定のやかましい時だけにあぶなかった。それでも、全国で先生ただ一人が連座規定の適用をまぬがれて、無事であった。

また、この時の選挙で金沢市に決定していた北陸地方の鉄道局を、投票日の前々日の一月十九日に新潟市に変更決定したのであって、このことがこの選挙の勝因の一つでもあったのである。この秘話は、私と新潟交通の中野四郎太社長との打った、選挙裏の一芝居である。

しかるに、この当選の喜びの最中の二月二十六日に、いわゆる二・二六事件が起きて一輝先生は収監され、先生の身辺も多事多難であった。

翼賛選挙と戦う

翌十二年の選挙は無競争で当選されたが、十七年の翼賛選挙こそまことにひどいものであった。選挙戦が始まって間もなく、新潟の野沢翁から「急用ある。直ぐ来い」と言う電報が来たので、新潟へ行き、野沢翁を訪ねた。

翁は「君が選挙違反による公民権停止中で動けないことは判っているが、なにしろこんどの選挙は全く無茶だ。地方翼賛会の幹部や在郷軍人会役員等が、町村長や警察署長と連携をとっての大選挙干渉だ。わが党の幹部も警察がこわくて、わしの言うことなど聞いてはくれない。わしはもう心配で耳が全然聞えなくなってしまった。こんな時勢にこそ、北君のような人物が必要なんだ。日本で一人でもよいから非推薦の北君を当選させたい。君は、ぜひわしの代りに各町村長や党の幹部等を説き廻ってくれ」とのことで私はそのまま佐渡に渡って各町村を歩き廻り、さらに西蒲原、新潟と暗行を続けた。

幸い、この選挙にも辛勝することが出来たが、先生は当

選と同時に「造言蜚語」と言うかどで、新潟刑務所に収監された。塩野元法相、小原元法相等の尽力で「流言蜚語」であっても「造言蜚語」ではないと言うことになり、先生は難をのがれた。

翼賛選挙は東条内閣の下で、時の商工大臣岸信介氏が総元締となり、翼賛会推薦候補以外は一人も当選させないと言うものであって、非推薦になった候補者と言うのは「前年度翼賛会予算六百万円を今年度は三百万円に削減すべし」として、前年度より増額される政府の翼賛会予算成立に反対の青票を投じた五十数名の前代議士諸公であった。

非推薦で当選

この時の選挙で当選した者は、保守系では尾崎行雄、鳩山一郎、北岭吉、安藤正純、星島二郎、芦田均、川崎克の七名だけだった。選挙がすんで直ぐ尾崎愕堂を除く六名が中心になって、非推薦組が山王ホテルに「偲儕会」と言う会を作り、毎日ここに会合していた。

世話人はこのホテルの総支配人であった植原悦二郎氏（非推薦落選組）であった。しかし、この会の人達はことごとに東条さんや軍部に睨まれ、いくばくもなく翼賛会に吸収されてしまったが、尾崎先生と北先生の二人だけは被告あつかいされて、翼賛会に入れなかった。

鳩山さんは翼賛会には入ったが、直ちに軽井沢に逃避して、ついに終戦まで東京へは出て来なかった。終戦と同時に軽井沢から東京に出てこられた鳩山さんは、さきに非推薦当選組五人を自宅に招請して、純正且つ清浄なる政党を結集したいと言い出し、翼賛会推薦者は一人も加えないと云う意気込みであった。

鳩山さんの要請

この中の斎藤隆夫、川崎克、北岭吉の三名は旧民政党であったが、斎藤、川崎の両氏は宇垣一成大将に政党組織の動きがあるので、一先ず鳩山党への参加は見合わせ度いと申出た。そうなると先生一人が鳩山党に残るわけにもいくまいと言うので、鳩山邸へ不参加の申入れに出掛けたが、「いや困ったことになった。鳩山さんが俺の手を取って、

北君どうか君だけは踏止って僕を助けてくれ。斎藤、川崎両君も必ず帰って来る。いまは相談役としておいてくれ。宇垣さんの動きを見届けて帰って来るとのことだからと言うのだ。

それに特にいまは国際情勢の判断が一番大切な時で、外字新聞を精読出来る代議士は君をおいて他にはないのだ。ぜひ僕を助けてくれと言われ、俺はつい踏止ることを承諾してしまったが、君どう思う。斎藤、川崎両氏が今後民政党を再建することにでもなったらどうする。第一選挙区のことがあるし、俺もほんとうに困ってしまった」と、実に先生としてはめずらしく悄気きっていた。

私は「戦争のため一たん解消した政党であり、国まで破れた現在では、政党と言う名の政党でさえあれば、何党であってもいいのではありませんか。ことに鳩山さんが終始一貫して政党人らしい心情を持ち続け通したその信念に、先生が共鳴することで充分ではありませんか。選挙区の方は私が行って何んとかまとめます」と、一時的な気休めを言ってしまった。この気休めが、ついに大変なことになり選挙区では無断で民政党を離脱した北に入れるなと宣伝されていつも苦戦を続けたのである。

岡田知事の助け船

特にパージから解除された直後の二十七年の総選挙は、実に大変だった。四年間の空白は恐ろしいものであったが、それにもまして困ったことは、前年新潟県知事選挙の際、岡田現役知事の対抗馬として、安中忠雄氏を先生が蔭で支持したと言う事がたたって、岡田知事以下全県庁役人が挙げて北を落せとばかり、自由党（吉田派）公認の葛西嘉資氏を押して、先生の地盤を根底からゆすぶっている。

その上、先生は鳩山派と言うことで、選挙区は全く葛西一色で爪も立たないと言う有様であった。先生と私は、選挙前に佐渡で演説会や、座談会を開く予定で出掛けたが、両津、吉井、金沢の三町村以外の町村では会を主催してくれる人がない。みんな葛西さんが村や町の保育園をこしらえてくれたので、義理があるからこんどばかりはかんべんしてくれ、と言うのだ。先生も私もほとほと閉口して、三日目に東京に引返えしてしまった。

ところが、六月になって、岡田知事から先生に私信の封書が届いた。先生は「岡田から泣き事を言って来たが、いい気味だ」と言われ、手紙を渡された。文面は「全く人と言うものは、あてにはならない。県を挙げて戦っている只見川電源開発問題で県のため努力していた本県選出代議士の四人が、福島案に賛成してしまった。これで本県案は惨敗だ」と大体こんな意味のことであった。

私は「しめた。この手紙で一芝居打ちましょう」と言うことで、友人の某新聞社のF氏に相談し、通産省記者クラブと公益委員会、電気委員会の記者会の連中三十数名に集ってもらい、岡田知事と県土木部長をこれに出席させて、新潟案の説明会を開くことにした。知事が病気のため、野坂副知事と本間専門委員が出席して詳細なる新潟案の説明をし、さらに、質疑応答があった。翌日から各社が只見川問題を大きく書き立てた。福島県もやっきとなり、大竹知事が陣頭に立って報道陣への説明会を開き、いよいよ、吉田内閣に福島案実施決定の猛運動を始めた。

八月上旬に至り、急に福島案の実施が決定すると言う情報が入った。そこで私は先生に「こんどの総選挙では鳩山自由党が必ず勝つから、鳩山内閣になったら原案実施を中止すると言う言質を、鳩山さんと大蔵大臣に内定している石橋さんから取って来て欲しい」と言った。鳩山さんも石橋さんも「吉田内閣の決めた事は、全部中止してしまう」と言う、実に力強い言質を先生に与えてくれた。

これを各新聞社に伝え、広範囲にわたって宣伝することにした。この事が両県を強く刺戟して、愈々両県の攻防戦ははげしさを増し、両県の全県議が交代で東京に詰めると言う騒ぎになった。吉田さんもついに大竹、岡田の両県知事を呼び出し、両県案を同時実施することにして両知事に握手をさせた。

これで揉みに揉んだ只見川電源開発問題も解決となり、新潟県と福島県とは仲直りすることになった。九月に入って総選挙戦が始まり、先生が新潟の大野屋に着いた晩、岡田知事が浴衣姿で大野屋に現われ、先生に電源問題の礼を述べた上、ワイ談義を一席ぶち、精力剤を先生に渡して帰った。

葛西氏を千票離す

選挙戦は文字通りの苦戦ではあったが、岡田知事が蔭から各町村長に「北君は只見川問題で大事な人だから、ぜひ落さないようにしてくれ」と指令を出していた。昨日までは北を落せと云った知事が、今日は北を落すなとは全く夢の様な話であったが、ほんとうにこの時くらい嬉しかった事はなかった。今度は当選は無理だろうと言われていた先生が、ついに葛西氏に一、〇〇〇票の差をつけて勝った。

先生は戦時、戦後とずっと鳩山さんと行を共にし、しかも、戦後はとくに鳩山さんに情義を立てて自由党結党に協力し、しかも、選挙ごとに苦しい戦いを続けると言う大きな犠牲を払いながらも、鳩山さんとの信義に生きた。

戦後は、目先きのことだけで右顧左眄し、今日は吉田、明日は鳩山、とウロチョロする小物供が、人の記憶には名も残らないような大臣として、ウヂ虫のわくように沢山出来たが、先生をただの一度も大臣にしなかった戦後の政治家と言う名の人々には、全くあいそが尽きはてている次第だ。

政界は義理人情浪曲の世界だ、などと人は悪口を言うがその浪曲調のかけらさえ見られなかった政界の非人情な現状は、全くお粗末の限りだ。追憶は次から欲と尽きないが紙面の都合でここらで筆を擱くこととする。

（多摩美術大学理事長）

一輝・聆吉両兄弟について

加藤好正

おことわり――文のおもしろさから先生の敬称を略し、すべて氏でよぶことにします。

兄の遺骨を墓標に収む

昭和三十六年八月十九日は、北一輝氏が二十五年前のこの日、代々木原の陸軍衛生刑務所の西北隅にもうけられた処刑場で、あたかも仙客が故山に帰るにひとしい、いとも従容としたすがたで、銃弾そそぐ夏草の露と消えた祥月命日である。かねて警世家、安岡正篤氏を筆頭とする志人の仲間によって、目黒不動尊の境内に革命家北一輝をたたえる大石碑を建立したほか、ここから約百メートルほどもあろう墓地に、赤みかげ石による美事な墓標も立ち、建碑式の盛大な催しも終えて、正午過ぎの焼けつくような真上の陽ざしの中で、遺骨をこの墓地に移す段にいたった。

このとき、一両年まえから次第に歩行の足どりが危っかしくなり、何となくよちよち歩きのような、至って気の毒な様子になった聆吉氏は、実兄一輝の遺骨を収めた白布の大きな箱を両手で顔の高さに奉持してゆく。その気慨は往年のままであるが、足どりは今にも前えのめるかとも思われるほど危っかしい。でも、本人は精いっぱいの頑張りで真剣そのもの。一生一度の一輝の遺骨を奉持した、恐らく聆吉氏の生涯を通して、これほど感激の絶頂に立ったことがあろうか。

その心情は、果して名誉か？　違う。歓こびか？勿論違う？　悲しみか？　それでも無い。では何か？　生涯を通じてのこの感激は、ただ無性に雄叫（おたけび）したい程の一輝・聆吉両兄弟の情熱を、一つの炬火にして、二人の兄弟のこと志と違った腐乱の世の中を、焼き尽したいほどのものを感じながら、一歩ずつよちよち歩きの足をふみ出していたのではなかろうか。

汗ばみの中から感激にむせぶ引きしまったその面上は、路にゆき交う人々を異様に感じさせたのか、皆振りかえりつつゆき過ぎて行く。

いまにも前にのめりそうなよちよち歩きに、ハラハラさせられた誰かが進みよって、お持ちしましょうか、と言ったら「いや、よろしい！」と不気嫌なぐらいの語調。いや待てよ。はたからジッとみているものにとっては、奉持して歩いているつもりの聆吉氏が、ささげた実兄の遺骨に逆にささえられて行くようにも見える。

一心不乱に一歩ずつ出す足どりと共に、聆吉氏のささげた手の触感によみがえるものは、或は幼かりし折に兄弟でたわむれたとき、互に手と手、軀と軀がふれあったときの温い幼き血潮の感触が、なんとなくよみがえり、いいしれぬ懐しい情感に、心の躍動も感じているのではなかろうか。

いま面上にあふれてただようものは、ひとえに一輝に対する崇高な敬愛の情以外になかった。

やがて遺骨をすっかり墓標の下に収め、青木大僧正を初めとする僧侶の読経が、小さい陽よけのテント下で行われたが、その間多数の参加者は、皆真夏の太陽の直射を木蔭に避けていたのに、聆吉氏一人は脱帽して墓前正面に直立し、陽をいっぱいに受けていた。ほどなく佳子夫人の注意でようやく木蔭に移ったほど、実兄を祭ろうとする一心のすがたは、心ある者のひとしく打たれたところであろう。

この日以後、筆者は心して聆吉氏の実兄に対する心境をさぐるようにしたが、かってもひそかに同様な思慕のあったことはいなめないが、この頃ほどハッキリと感じとれるほどではなかった。いやいや、聆吉氏の寿命の限界に近づくに従い、一輝えの思慕は涙ぐましいほどに熾烈となったように思える。

従って、このことにふれる談話は勿論、これに関する一

切の事物にたいしても、思慕の油に火を放ったように、パッと炎えるように面上が輝き、たとえ一言半句といえども決してゆるがせにしなかった。ただ、こういう風な一言をつけ加えて、昔日を偲ぶ微笑でまぎらわした。「兄の意見は、たいてい共鳴していたが、人類の進化の度合については、いつも意見をことにした」

一輝と獄中の訣別

一輝未亡人として、やがては夫のもとに行く準備に余念のなかった鈴子刀自は、その生前たまたま筆者に北兄弟の獄中の訣別の場面をこう語った。

「もはや主人の処刑も近づいたころ、刑務所の所員に相談して、兄弟のこの世の最後のわかれをさせたいと決心して、その方法に付いてはかったところ、こころよくご協力下さいました。

そのとき一つの心配ごとは、折角のこの機会に、両方のはげしい性格から、どんなことで衝突するかわからぬものですから、あらかじめ所員のかたと打ち合わせ、万一両方の気色が険悪になりかけたときは、私が弟の方のうしろにいて一寸手頸を上げ、所員の方に信号した節は、時間だといって二人の間の（刑務所内の会見窓）とびらを下ろして終りにしてもらう約束でした。

さて愈々会見となり、どうなる事かと心配しましたが、幸にもそんな事はしなくてもよかったのですが、極く限られた短い時間に、兄の方から口を切り出しまして、三つの事をいいました。この時の二人は実にきびしい態度であり、兄は弟一は何々、という調子で簡単に（宣言口調のように思える）かたり、弟の方はこれにただハイというような返事をしただけで会見はおわりました」という話であった。

この一輝氏の談話の内容は、紙面の都合からここに掲げることは無理と思う。充分の紙面をもって記述しなければ誤解がおこる可能性があろう。しかし、この一輝氏の秋霜烈日な宣言口調の遺言は、ことごとく一輝流儀のものではあるが、その独特な格調の高い大愛の情魂をこめた、個人的な信念と、社会的かつ国家的な見解をミックスしたものであったように確信できる。

昔から「大愛は冷酷に似たり」ということばがあるが、この一輝の遺言こそは、その最高頂をゆくものであろう。またこの時だけは特に弟聆吉氏には痛烈に感得できたであろう。そのすがたが、ただハイという様な返事でおのずからエリを正した情景も想像できないではない。

兄弟は心から愛し会う

聆吉氏の葬儀の当日、その司会をつとめた、この兄弟とは切っても切れぬ仲である元参議院議員厚生政務次官の浅岡信夫氏は、この日の弔辞十三人のさばきに苦慮していたが、この弔辞の中で筆者ただ一人が、北兄弟の事に言及したので、あとで浅岡氏は「じつはこの弔辞が、今日はぜひほしいところであった」と述懐していたほどに、同氏の心ずかいも、さすがに人生最後における聆吉氏のもっとも大きい関心事を見抜いていたと思う。聆吉氏のこの情にふれることが一番故人のこころを温めるものだ、ということを筆者も亦あらゆる機会に確信をもって判断できた。

世間では、この兄弟のはげしい性格が生む論争や、単なることばの衝突を、平凡に解釈しがちではなかったか。そんな事からこの二人の兄弟仲は悪いという事で、一つの歴史的な記録をなしているようだが、むしろこうして残された評判こそ、無理もないことだ、といいたいほどに、この兄弟仲は尋常なケースではなかった事は明かなようである。

だが、二人の頭脳と性格は、存分にそれぞれの得意の分野に伸張しながら、兄弟愛の一線の上にもどる時は、愛情という一つにとけ込もうとする情熱と、真理の追求という厳密な意味での理智の接触から起る、必ずしも一致しがたい激しい電撃性とから、矛盾をはらぬ激越な愛情が一見衝突したかのような閃（せん）光現象をおこしたものではなかろうか。

しかしこの超俗的な現象の一方は、その激情を弟の心底に残して五十五才でこの世を去るや、弟はさらにこれより二十四年間の長年月を生き、七十九才にして長逝するまで人間的にも充分円熟の境地に入り、兄のこの激情を円熟した情感の中に包み温め、この中に二人の愛情は溶解し尽して、一切を達悟して現世の幕を閉じたのだ。

（元アジア同志社理事長、日本自治総会々長）

おやじ追想記

亡岳父三年忌の席上、岡野先生より別稿の如き「想い出録」を頂戴したのが切っ掛けとなり、母よりの強い希望もあって本小誌の発行を計画致しました。元秘書の稲辺氏の尽力に依り、皆様からかくも真情の溢れた追憶の文を頂き、誠に感銘これに過ぐるものはございません。遺族の一員として生前、歿後を通じ暖かい御厚情を感謝致すと共に故人に対し何よりの贈り物と信じ、この小誌を故人の霊に捧げさせて頂きます。

編集はその道のベテランである稲辺君に一任し、私は皆様から御寄せ下さった「故人の想い出」を拝読するに止まりましたが、何れも故人の真姿を画き、その心情に触れられて、今さらながら故人の声を間近く聞き、その皮膚に触れる心持であります。

私は遺族の一人として、本誌の最後の余紙に皆様の御厚旨に感謝の意を表するに止まりたいと思いましたが、稲辺君より身内として何か想い出を率直に載せろとの推めもあって、いささか断片的ではありますが、故人を追想して拙文を綴ってみました。

懐しき追憶

私は終戦後南方より復員し、実父も、その自慢の屋敷も失われ、焼け出されの仮寓で左腕を三角巾で吊り、毎夜いかがわしき酒をアフっていました。その当時のわれわれ

（インテリ敗残兵）の心境は、一口にいって誇りと自信を失った人間像であり、すべてに懐疑的で自から五等民族と認め、植民地人種と卑下していたわけです。

とくに、日本の指導者層に対する信頼感は全く消滅し、その反面解放された左翼が、あたかも、戦勝国人の如く振舞う姿も、闊歩する占領軍兵士の姿と同様に、強烈な増悪の念を燃やしていました。しかし、戦敗れて第一線から帰ったわれわれは、ほとんどが民族と国家という問題について考え、懐疑を持ち、悶えていたことだと思います。

当時毎日曜の夜国会討論会と称して、各党一人宛の代表が論議を闘わす放送がありました。当時の私は、保守党は米の傀儡政権、革新派は発育不全の便乗者として双方に信頼感を失っていたのですが、この討論会の内容を回を重ねて聞くうちに、われわれの前途に微かながら光明を見出す気持になって来ました。それは自由党代表北吟吉と、共産党の徳田球一の一騎打の論戦であります。

得てして保守派と極左の対決は、論戦そのものでは左翼の方に歩があり、とくに、敗戦の当時としては、保守派にとって相当なハンデキャップを負うていたと思われます。

しかし、この論戦の中に、われわれが保守的思想のうちに求めていた理論的根拠が徐々に引き出され、民主政治を目標とする民族と国家の在り方を、討論を通じて汲み取ることが出来る様な心持になりました。私はこの時初めてラジオと新聞を通じて、北吟吉なる人物を知ったのです。

私が結婚したのは二十三年夏ですが、この時、北吟吉は追放になっていました。それから親子そろっての不遇時代が始まり、おやじはなかなか解けぬ追放の絆に髀肉の嘆を喞い、私は青年事業家を夢みて大倉を飛び出し、やることなすこと失敗の連続、スッテンテンになって、残るは借金ばかりとなってしまった。

この時おやじは「お前はもはや有産階級ではなく、また無産階級でもない。かかるものを不産階級というのだ」と新語?を名附けられて笑っていた。しかし、おやじは一言半句の文句も説教もいわず、負債もまた資産なり、と、会えば談論風発、先ず一杯というところで、今から考えれば叩きのめされた私に、如何にもおやじらしい慰めと鞭撻を与えていてくれたのだと思われます。

この時分の世相は、経済的には例のドッヂ旋風が吹きまくり、インフレと闇商売で空廻転をしていた日本経済の体質改善の時代で、私は見事この旋風に吹き飛ばされ、事業的センスの全く無いおやじは売喰専門。しかし、応接間では毎日何人かの来客と「飲酒読書五十年」と快気焔を上げていました。

この間のお袋さんの苦労は全く知る人ぞ知るで、今にして思えば政治家として終如一貫、清廉潔白で通し得た北吟吉の生涯の半分はお袋さんにあり、と考える次第です。

商人的素質の無いことは勿論でありましたが、また非常な感激家でもあったおやじさんは、人に御馳走になると、その感激一入であります。会う人誰彼をつかまえて「昨夜は〇〇からフグを招ばれ、芸者が八人来た」と大喜びで、このくらい御馳走しがいのある人も稀らしい。私はこの時代にそれが出来なかったことを、実に残念に思っています。晩年、なんとか引っ張り出そうと迎えに行くと、偉大なる監督者お袋さんの厳重なる監視下で、どうにもならずスゴスゴ引き返す有様。時すでに遅きを痛感したのであります。

追放解除の噂が飛び始めた頃、こちらは不産階級からようやく無産階級へ昇格?しつつあり、親子共意気軒昂であったが、懐の方はまことに淋しく、おやじさんはお袋さんから毎日の車代と煙草賃の支給に預って外出、帰りの車代を二人合わせて計算し、ハシゴ酒をやるということで、その当時の仲間は末永大祐君と中田瑞彦氏等。

末永君は故末永一太郎氏（大阪商船重役で、頭山満翁と義兄弟の仲だったという変り種）の長男で、私の親友であり、亡父一太郎氏は北吟吉のファンで、生前いろいろ後援された由。親子二代に亘る交際となったわけ。中田氏は吉田元首相の令甥で、鳩山派のおやじの思想と人物を慕って来られた人。集まれば飲み、且喋った当時の記憶が懐しく今でも蘇ってきます。

対米債権と河野爆弾質問

私は政治には門外漢であり、選挙に一度行っただけで、日常の細かいおやじの政治活動は知りません。だがたった一回、私が直接に関連を持った問題があり、今これを追想の一コマとして記します。

前記の親友末永君が、講和と同時に解散したスキャップから通産省に移り、占領当時の日米間の通商残務整理をしていました。時は丁度追放解除、議員に返り咲き、党内鳩山派結成でおやじは至極意気軒昂でありました。

しかし、そのこととは関係なく、私は末永君としばしば会合し、憤慨していたことがありました。それは米国に被占領当時、朝鮮に輸出した石炭の代金五千万弗が、どうしても取れないということであった。米国は資料さえ揃えばいつでも払うといい、末永君は三年間この資料の作成に心血を注いで、完成しているという。しかし、何故か官上層部ならびに政府は、この債権を回収しようとしない。

察するに、政府は、当時独立と同時にガリオア、エロアの救済資金の返還を求められることと絡めて、逡巡しているらしいというのである。しかし、米国は払うべきものは払い、回収するものは回収するというコマーシャルベースは絶対に崩さない国だし、日本の政治家の考える様にドンブリ勘定的な清算はあり得ない、と末永君は言明する。私も、もっともだと思った。

何しろ、昭和二十七年度の総予算が一兆円以下だったと記憶するから、二百億近い債権は当時大変な財源である。しかも貸先は世界一のお金持。何時でも払いますとおっしゃる。末永君はこんな隷属的な行政に使われるのはいやだから、辞めるという（もっとも、私も随分煽った罪はあるが）。

しかし、出来得れば末永氏の今日までの努力に報い、合わせて国家の財源を得るという大義名分を立てて、おやじに相談したが、しばらく機熟せず放置の形で、われわれも半ば諦めていたところ、鳩山派が党内野党を唱えて、逐次国会の雲行が怪しくなって来た頃、突然私はおやじに呼ばれ「あの資料を出せ。必ず目的を達して末永君に報いる」というので、早速末永君を口説きに掛ったのですが、思うに私はここで親友の生涯の方向を変えてしまったのであります。

ようやく、末永君を口説いて入手した資料を、おやじと共に院内で根本竜太郎氏に手交し、「われわれはこの件に関して金銭的報酬や利権等の目的は皆無である」ことを強調し、鳩山派の政策の成就と、具体的なこの問題の解決を希望して別れたのである。数日後この問題が河野一郎議員

に依って爆弾質問となってあらわれ、国会は混乱し、政府筋は狼狽して、資料の出所の追求に狂奔したのであった。

しかし、幕切れは意外にアッケなく、その出所の判明と問題の妥当性を政府も野党も認め、鳩山派の人気向上と河野一郎議員の卓見を、世間では大いに認識して終止符を打ったのですが、その結果、末永君は勿論誠、そしておやじも別に報いるところなくして終ってしまった。

結果からいって、末永君はその後某公館に優遇され（現在ロンドン出張中）、問題の債権は採り上げられて回収された由。先ず目的は達せられたといって良いかも知れませんが、この事件に少しでも関与した私としては、釈然としないものがある。これだけ正確な資料を握っての代議士の質問は、国会の歴史でも稀らしく、しかも目的はあくまで国家的に純粋のものであり、大義名分が通っている。しかもこれが北吟吉の手許から出たのであるから、鳩山派が政権を握った場合、もっとおやじが報いられても良かったのではないか。身内の身びいきかも知れないが、親友末永君の現職を犠牲にしての問題だけに、残念でたまらないのであります。

しかし、後日談として一言申上げておきたいのは、如何にして資料の出所がかくも早く判明したかについては、いろいろ取り沙汰はあるも、真相はある通産省の中堅人物がトンダ濡れ衣を着せられそうになったため、末永君が自ら告白したのであって、このために当時の鳩山派の幹部としては、もっと揉みに揉んで吉田内閣の屋台を揺すり、国民にアピールしたかったという点で、物足りなかったと思うのであります。しかし、その目的は達せられたと私は信ずるのであります。

おやじは此処でも政治家としての処世術に成功しなかったというよりも、処世術に利用しなかったのだ、と私は考えたいのです。

私のおやじ観

最後に、私の北吟吉観なるものを少々述べさせて頂いて追憶の一端にしたいと思います。

私は北一輝先生の思想や人物は全く知りませんが、遺作等に依って彼が革命児として天才より、鬼才と思われる頭

脳の持ち主であったことは、私如き者でも窺い知ることが出来ます。だが、北昤吉なる人物は、常に哲学を基礎にしての社会観であり、社会知識に終始していたと思います。私がおやじに接して、一体何に惹着けられたかといえば、かの有名な能弁でもなければ、外面的な政治家としてのフアイトでもない。一言にしていうことは非常に難かしいが「哲学者としての北昤吉と、憂国の士北との要素と性格の結合に在る」と申し度いのです。

しかして私は、おやじに接して常に感じたことは、情熱や体力だけでは政治は出来ないし、また政治は生き物であるから、象牙の塔の中で万巻の書を読んだ知識だけでも出来ない。現在の政治家は、知性という要素が絶対必要だし加うるにこれを政治に生かす情熱と実行力が必要である。これはその人の持つ性格と能力の問題である。

私は改めて在学時代の某教授の言葉を思い起します。「君達の中で経済も政治も法律も学ぶ資格のある者は、極く少数だ。何故ならば、君達は方法論を学ぶには余りにも哲学的要素が無さ過ぎる」と、また、ある文学部の先生は「社会意識無くして社会知識を学ぶことは、砂上の楼閣である。社会意識をつくるものは哲学である」と。

学窓を出て十五年、おやじに接して哲学の偉大さを改めて知り、そしてその基盤の上に積み重ねられる社会知識の如何に正当にして価値あるものであるかが判った様な心持であります。

世間では北一輝と昤吉を混同し、類似した思想の持ち主の様に思っている人もあるかの様ですが、私はこの点大きな相違があると思います。私には一輝先生を批判する様な資格も知識もありません。しかし、おやじの政治家としての思想は、前述の様に、あらゆる人生観も政治観も哲学的基礎の上に樹立していて、したがって、革命者的な理論の飛躍は絶対に無い。

性格的にはあるいは革命児的な情熱を秘蔵していたかも知れないが、それがイデオロギーとして頭脳の中で纏ってゆくときと、行動となって外面に出てくるときは、すでに確固たる哲学的基盤に立脚した卓越せる知識の網で沪過されたものに仕上がっているのである。

それ故、神掛り的な極右に対しては、高天原的右翼と名附けて相手にせず、また、観念論的な弁証法的唯物論に対

しては、縕蓄を傾けたあらゆる角度の理論、経済学、政治学、そして倫理学的に呵責なき批判のメスを振う。かって私が学生時代の慶応大学塾長、小泉信三先生のマルクス批判に傾聴したわれわれにとって、おやじのそれは純経済学的立場からの反論では無いが、哲学的に解剖してゆく人間の慾望と社会倫理観を含んでの唯物論の批判は、大いに傾倒するところがあると信じます。

かかる要素の上に天性の性格が作用するおやじの行方は第一己をゴマかすことが絶対に出来ない。したがって、身を翻えす遊泳術は出来ないし、いい換えればマアマア主義の浪花節調が不得意なのである。このことが現代の政界、とくに保守陣営に受けなかったとすれば、現在日本の保守政界にとって嘆かわしいことではないであろうか。

保守・革新を問わず、国民は政治に智性と情熱と、そして正義を求めていることは疑い無いことですが、現実の姿は「道未だに遠し」の感は私だけでは無いであろう。しかし私はこう信じたい。生前、死後を通じて北昤吉を支持し、後援し、鞭撻して下さった多くの方々、そしてこの追憶の小誌を御読み下さる皆様は、必ずや第二、第三の北昤吉が日本の政界に出現することを切望なさっておられることを信じて止まないのであります。

最後に、私は同族の一人として、誠に僭越にして、かつ暴筆に走ったことを深く御詫びし、改めて皆様の生前の御厚情を感謝して稿を閉じたいと存じます。

（故北昤吉女婿、中外石油(株)代表取締役、日本車輛製造(株)常任監査役）

恩師の一影

稲辺小二郎

北昤吉先生の「人間像」を描くことは、非常に難しいことです。先生の伝記、思想、評論等については後日の機会に譲り、私がここで申し述べたいことは、とくに、奥様から「主人が国会議員として在職中のことを、郷里の人々にお伝えする意味で、余り世の中に知られていない一面を書くよう」にとのことでしたので、私自身が戦後二十年間、親しく御指導を受けたことや、先生の秘書として担当した仕事を通じて、国会活動の一面を回想することを主たる狙いとするものであります。

また、同時に、先生から生前直接聴かされた断片的なエピソードめいた話なども、加えておきたいと思います。

ですから、この一文は北先生の全貌を示すものではありません。ただ、私の狭い視界を通じてシャッターを切ったおぼろげながらのフィルムを、今日現像して、在りし日の先生の一影を描こうと思います。

何と申しましても、先ず書かねばなりませぬことは、第一に憲法改正についていかに御苦心なされたか、第二に先生の国会活動、第三に晩年の御生活、以上の三点に焦点を合わせて、述べてみたいと思います。

憲法改正に対する態度

先生は、この憲法改正は読んで字の如く憲法の改正であって、断じて新憲法の制定ではないと論じておられました。「この憲法改正は当時、マ元帥はもとより、ワシントンの極東委員会の全面支持のもとに出来たものである。当時の戦勝国は、日本とドイツの軍国主義が打破され、英米側とソ連側とが国際連合を作って合議すれば、恒久の世界平和は維持されるという誤算、錯覚から、憲法改正にふみ切ったものであって、後日、国際情勢の変化から、日本にこの憲法を強いた米国は、反省と狼狽する時が来るだろう」と述べられたことがあります。

十数年前に述べられた先生の見通しが、あたかも今日の情勢を指摘しているかの如く、その洞察力には感服の外はありません。そして、昭和二十一年六月二十六日には、当時の自由党政務調査会長、自由党憲法改正委員長として、憲法改正案本会議上程の際、および、同年七月一日憲法改正委員会開会の際、自由党を代表して吉田総理、金森国務大臣に対する質問演説は、一時間余におよび、その内容は複雑多岐にわたり、しかも草稿なく、憲法改正草案のみを手にしてなされたもので、終戦後、第一の名演説と称せられたものであります。先生のこの時の演説の内容は、改正草案を現行憲法に成文化されるまでに、いかに大きな影響力があったかを示すに足る歴史的意義あるもので、私の当時のメモに従ってその与えた影響の主なものを拾ってみます。

一、憲法前文の飜訳臭をかなりの程度に修正し、原案の誤訳を多数訂正した。

政府提出の草案にある前文の修正は、先生お一人の手によったもので、それが自由党案となったものです。一例をあげると、先ず「国会における正当に選挙された代表者」を「正当に選挙された国会における代表者」と訂正した。先生は「国会における代表者」は結局、国会議員のことであるから、飜訳臭味を除かんがために、国会議員としようと提案したが、遺憾ながら通りませんでした。

前文の修正で人知れず御苦心なされた点は、英文にあるgovernment(ガヴァメント)にあたる適当の日本語を見出すことのようでした。日本文では「政府の行為」および「国政」とありますが、英文では共にgovernment(ガヴァメント)を用いております。「このgovernment(ガヴァメント)は狭い意味では政府の意味に取れるが、広い意味では立法部、司法部、行政部全体を包括しているから

『為政者』と訳すべきである」と主張しておられました。「こうした誤訳は憲法小委員会の諸君が、原案に囚われ過ぎて、思いきった訂正が出来なかった事と、社会党代表の森戸辰男君と鈴木義男君が履歴からいって学者らしいが、揃いも揃って英文を正解する能力がなく、僕の不在中（旅行中）、森戸、鈴木両君の謬見に押しまくられてしまった」といって、いつも残念がっていました。

そして、この憲法は外務省のチンピラ共が訳したので誤訳だらけだ、といって、たしか、昭和二十九年三月頃と思いますが、衆議院外務委員会で岡崎外務大臣をツルシ上げ、当時の新聞論調をにぎわせたものです。憲法の誤訳を指摘したのは、北先生が日本で一番最初のように思います。

二、第二章の戦争放棄の意義を明らかにし、さらにこれを修正せしめた。

三、第三章の国民の権利および義務の規定中、左の条項を附加した。

㈠ 日本国民たるの要件

㈡ 納税の義務

㈢ 公務員の不法行為に対する賠償規定

それから、第三の納税の義務のことで一寸ふれておかねばなりません。先生は第三章の国民の権利義務について質問された中に「この章には納税の義務の規定がないが、政府は忘れたのではないか……。どこの国の憲法でも国民には納税の義務があることを書いているが、この草案にはその規定がない。現に二十七条には『財産権はおかしてはならない』と規定してあるが、納税の義務を規定してないと政府が財産税をとることも憲法違反の疑いを生ずるおそれがある」と力説して、現行憲法第三十条に納税の義務規定が書かれるようになったのであります。

先生の国会活動

北先生は自民党の所属とはいいますものの、一人一党的な存在でして、だれ憚かることなく振舞っておられました。昭和二十七年の選挙の際、新潟公会堂において、約千五百人の聴衆を前にして、当時の保安隊の教育訓練にふれて次のような興味深い演説をしました。

「保安隊で機械化部隊などの専門知識を必要とする隊員

は、終日の訓練が必要だが、他の隊員の訓練は、普段は一日三時間ぐらいでよろしい。ことに、今の保安隊には筋金が入っていないから、勤労隊とでもいうような名前をつけ例えば、ダム建設隊、道路改築隊、耕地整理隊、植林隊、港湾整備隊などの大体五つの部類に分けて、隊員の団体訓練を行う必要がある。これは、日本の兵農一体主義に通じ現代青年を鍛える意味で意義のあることだ」と演説し満堂の聴衆を緊張させたことがあります。

このことは、昭和二十九年三月十五日、衆議院外務委員会で木村保安庁長官に質問した際にも同様なことを述べ、アメリカ的訓練では物足りぬから、日本人らしい訓練を施すよう、勧告めいた質問演説をしたことがあります。

面白いことに、社会党が昭和三十四年十一月十日に「平和国土建設隊要綱」なるものを発表した。社会党が、北先生の五年前の新潟公会堂での演説および外務委員会での稀少価値の質問演説を参考にして作成したものかどうかは別として、要綱案の名目が異なっても、趣旨が大体同じものです。

社会党の要綱案では、地方部隊の編成を七部隊に分け、㈠土地利用隊、㈡交通建設隊、㈢河川建設隊、㈣建築隊、㈤輸送隊、㈥通信隊、㈦国土調査隊等に分けて、日本再建の行動隊にしようというものであります。

今日の自衛隊が、河川の洪水や、災害復旧に活動して、各方面から感謝されておりますが、今後の訓練方法がいかようでありましょうとも、今から十年前に述べられた北先生の演説内容は、将来の建設的示唆に豊むものであったといえましょう。

また、国会に登院された時は、本会議は勿論のこと、代議会、両院議員総会などには、いつも出席されました。会議が流会になりますと、院内の社会党控室に入り込んで、だれかれとなくつかまえて談論風発、片山哲先生は「北君社会党へ入らないかね」などといって、一座の人達が大笑いをしたこともありました。

終戦直後、共産党が旭日昇天の勢いであった頃、国会の赤絨毯の廊下で赤鬼といわれた徳田球一代議士とバッタリ会った時に、「やあ徳田君、出てきたね。僕はハーバード大学の旧知の人から、ごく上等の肉をもらったから、君は砂糖を持ってくればスキ焼きを御馳走してやるよ。僕の家

で大いに議論しようではないか」

徳田代議士は「いま急がしくてそれどころじゃないよ」といって、さすがの赤鬼先生も敬遠気味のところへ、大久保留次郎先生が通りすがり「やっているね」と一言。笑って過ぎ去った。

無欲恬淡な一面

すでに御承知の如く、戦後歴代内閣（片山内閣は別として）の閣僚候補には、いつも先生が文部大臣、司法大臣、あるいは防衛庁長官候補の顔ぶれに出ていましたが、一回も大臣の経験はありません。法学博士の渡辺銕蔵先生が、しばしば議員会館にこられて「北君、一つ文部大臣をやって、文教行政を一新してもらいたいね」と説いておられたが、先生は「文部大臣か。君、戦後は臣という道徳観念がなくなったので、大臣という言葉も少々おかしくなったようだね」といって、微笑をたたえながら余り多くを語ろうとはしない御様子でした。

その時の先生の表情は「笑って答えず、心自ら閑なり」という言葉がぴったり当てはまるようでした。また、ダイヤモンド社の旧師、石山賢吉先生を訪れると、いつも「北さんは、三等大臣みたいな連中と一緒に大臣なんかやらん方がいいね。あの人は大臣をやらないところに値打ちがあるよ」と評していました。

ルーズヴェルト夫人との対話

もう一つ忘れ得難きことは、昭和二十八年、故ルーズヴェルト大統領夫人が来日した折、国会見学に来られたことがありますが、その時、衆、参両院議長はもとより、政党の幹部諸公は同夫人に頭をペコペコ下げてお礼ばかりいっておりましたが、先生はこのことを一寸腹にすえかねてか議長サロンで同夫人に一言した。

「あなたは御存じないかも知れませんが、占領軍当局が昭和二十二年四月、戦後始めての公選区会議員の選挙の際とくに杉並区の区議会議員の立候補者の中には、好ましからざる人物がいると選管に文句をつけ、選挙干渉をしたことがありましたが、占領軍のやることはまずいことばかりでした。

要するに、アメリカの日本に対する戦後政策には、三段階あります。第一段階はリヴェンジ、復讐です。第二段階はアメリカ流のリフォーム、改革です。そして第三段階には日本的な立場から復興しよう、リヴァイヴァルの時代になっております。リヴェンジの時代の国際裁判は無効だというぐらいのお考えを持っていただきたいのです」

ルーズヴェルト夫人は多少色をなして「戦犯のことは詳しく存じません。帰ったならば戦犯解除に協力しましょう」といったことが、後日、巣鴨の刑務所（戦犯収容所）に伝わり、佐藤賢了さん、橋本欣五郎さん、鈴木貞一さんさらに今村均大将から非常に感謝されたことがありましたが、この話なども記憶に残るものの一つです。

越後の良寛

私が深く印象づけられたことは、政党人としては珍らしく几帳面なお方で、無欲恬淡で、邪気がないこと、物事にこだわらず楽天的であったこと、判断と決断とが早いことそして、私を捨て、邪を憎み、国家百年の大計を論ずる時は人に一歩も譲らない、そういう先生でした。

第一次鳩山内閣が組閣前のこと、鳩山邸にて高碕達之助先生が鳩山先生に「北さんとは一面識もないが、政策のことには大いに論じ、閣僚の人選などには口ばしを入れないが、一体あの人はどういう人ですか」と聞いていましたが鳩山先生は「北君は越後の良寛みたいな人だよ」といっておられたが、側にいた私は、うまい批評をしたものだと心中ひそかに思いました。

陳情の処理

よく人は、北先生は天下国家を論じて、選挙区のことは省えりみないという話を耳にしますが、私は大いに反論したい。先生は御自分の成し遂げたことは、自慢話に語ろうともしない方でした。今の代議士は自派の親分を選挙区に連れて行き、自分のやった事は針小棒大に誇張し、公約実行はおろか、実現不可能な架空に近い話を持ち出し、選挙の際の得票のことばかりを考えて行動しているが、選挙民

を愚弄するも甚しいと申さねばなりません。

先生は郷里佐渡ヶ島のことでどんなことをなされたか、その二、三の例を述べましょう。今日、「離島振興法案」という法律がありますが、この法案は先生が綱島正興先生と相談して「離れ島は本土に較べると後進性であるから、なんとか法案をつくって本土なみに経済的、社会的、文化的にも引きあげなくちゃあならんね」「それは大変結構な話です。一つやりましょう」といって、院内第四控室で語り合ったことが、この法律案成立の基礎となったものです。佐渡ヶ島はおろか、全国の離れ島は離島振興関係予算(三八年度は八十八億六千万円)の恩恵に浴しているのです

佐渡関係で昭和三十一年度以降の業績をみましょう(国会中の業績全部を述べることは紙面の都合上省略)。先ず昭和三十一年新穂村溜池事業(この事業は昭和十九年二月全国ただ一つの溜池事業として八十万円獲得、これは先生の名刺で当時の賀屋大蔵大臣と佐藤徹次郎氏の直接交渉によるものである)では、佐藤徹次郎氏、菊池汎氏等の度重なる運動によって約一億円近く決定、元佐和田町町長加藤長三郎氏の努力で佐和田町の佐高、北校舎(三千五百万円)南校舎(二千二百万円)の改築予算、さらに中学校三校を統合するために、県立校舎の買収予算として一千六百万円を決定。また加藤氏は佐和田町公民館設立にも努力した。

「当時、町の人はこの公民館設立に反対した者もいたが、今ではこの公民館は貸し料だけでも町の大きな収入源になっている」と中川貢君などは語っている。両津市水道起債事業では元町長斉藤喜八郎氏、柴田町長、北末次郎氏、野口礼吉君等の努力で、初年度三千万円、次の昭和三十二年度には三千二百万円決定。さらに、両津病院の火災による復興建設予算七千万円は、伊藤久雄氏、松村信夫等の努力で決定。水津漁港の新規事業予算総額四千九百万円の中、初年度(昭和三十二年)二百五十万円決定。これは推弥平氏、織田治郎八氏等の漁業関係者の努力によるもの。(当時は水産庁では新規事業には一切認めない方針だったので予算獲得は容易でなかった)。

二見港の場合、先ず避難港の指定を受け、全額国庫補助を獲得。国府川改修事業では三千万円決定。小木町金田新田の無電燈部落には総予算百三十五万円の中、国庫補助四十一万円決定。金井村では金北山のレーダ基地問題、新保

川の漁業補償からマルクボダム、砂防ダム、農業災害保障等に四千二百万円の全額国庫補助の決定。これは当時村会議長の児玉太十郎氏(同氏の関係官庁への陳情のうまさには定評がある)本間市雄氏、石塚与次右衛門氏、光村初太郎氏等の関係者によるもの。赤泊港湾予算には約一千万円決定。これは野沢前村長、三浦貞一氏(現県議)によるもの。

話は前後しますが、新穂小学校危険校舎の増改築問題にふれておかねばなりません。当時の村長本間市郎左衛門氏議長の渡辺一郎氏、教育長の藍原小一郎氏、社会党の斗志後藤奥衛氏等を中心に全村挙げての陳情で、小学校は危険校舎で、児童が安心して勉強出来る状態ではないので、今度、鉄筋三階建てでエレベーター付きにしたいという(当時、全国の村で鉄筋三階建、エレベーター付きの小学校は一つもなく、新穂小学校は文部省より全国のモデル・スクールに指定された)この増改築問題で、初年度(昭和三十二年度)には四千四百万が決定した。

この時、私はこれ等の方々を文部省へ数回案内して、誠意の限りを尽して陳情の趣旨を弁明し、手早く大臣決済まで漕ぎつけた。ところがその後、現大蔵大臣の田中角栄氏渡辺良夫氏、稲葉修氏等が文部省へ行って「われわれの方へも予算を廻せ」と力んだが、あとの祭りであった。

元来、陳情面は秘書実務の主なるもので、関係官庁、諸団体へ行く前に、必ず先生から大臣か次官に電話してもらってから後に、私が陳情団を案内したものですが、どの官庁へ行っても課長以上は「ああ、北先生の関係者ですか」といって、割合いに話をよく聞いてくれて陳情の効果があった。名刺と電話一本で陳情の成果があったことは、先生の御人格の反映です。

いつも議員会館で先生と二人でおりましたが、私は部屋の掃除から電話の受付、お茶汲み、先生の身の廻りは勿論のこと、陳情処理等で全く多忙で、一人三役か四役分を手際良く立廻らないと、翌日の仕事に差支えたものでした。

私には事情もあり、日本テレビ放送に入社することになっておりましたので、秘書をやめさせて下さいと先生に申し出たところ、先生はどうしても承知してくれません。そこで、私は多摩美術大学の村田先生にこのことを打ち明けて、相談に乗ってもらう積りで電話をしたら一稲辺君。今

君が秘書をやめたらオヤジさんは困るよ。今日、オヤジさんの秘書としてつとまるような適当な人もいないし、思い直して僕の分までやってくれ。オヤジさんのお骨を拾うまで頼むよ」といわれて、私はこの村田先生の言葉に感激した。

晩年の御生活

先生は晩年になってからも、読書と瞑想に耽けり、世塵から遠ざかって飜訳に力を注がれた。昭和二十七年四月、ボストン社交界にその令名高かったニコルス女史から、ハーバード大学社会学のソローキン教授のもので、日本でも出版なされてはどうかとの手紙が届き、先生は即座に快諾の返事をアメリカへ送った。そして、同教授のもので「ヒューマニティの再建」とその姉妹篇「現代の危機」を文芸春秋社から出版した。この二冊の本は、世のセンチメンタルな平和論者などが一読すべき好個の書物である。

昭和三十六年晩春の頃、久し振りに旧知の易者恵美清晶氏（世田谷区下北沢に易者の溜り場があるが、その易者仲間から先生といわれる程の造詣の深い人）と新宿で会った折に「あなたの師匠であった北さんという人は、私のみるところでは、政界よりも思想界にいたならば、現実の世界に話題を提供する人になったでしょう」と。

先生は政界を引退なされてからは、「古仏像への趣味と鑑賞」とか「国法図鑑」などを好まれ、とくに日蓮聖人の佐渡流罪中の大書「開目鈔」をくい入る様にして読んでおられた。「開目鈔」は仏陀の予言と化導（ゲドウ）の真意を世に示すための書物で、先生の御心は兄北一輝先生と同じく、日蓮聖人の説く「法華経」に帰依しておられたかのようにも察せられます。

いつも安部磯雄先生の言葉を引用して「汚点なき生涯」を送りたいものだといっておられたが、まさにその通りの生涯で、いわば、水清い渓流に生息する「さんしょう魚」的な御生涯でした。

（元北昤吉秘書）

永年の御交誼に感謝

北佳子

主人の三周忌に際しまして、皆様方からの御好意に対し、故人にかわり厚く御礼申上げます。

省りみますれば、主人が昭和十一年に始めて政界入りをしましてから、この世を去るまでの二十五年間、何かと皆様方の一方ならぬ御世話になりまして、ただ、感謝の外はございません。

国会議員として在職中、各方面から多大の期待と関心を寄せられながらも、成すところなく、皆様にお別れを告げましたことを、日夜心痛く思っております。

この紙面をおかり致しまして、北が生前親しく交わらせていただいた友人、知人はもとより、東京始め、郷里佐渡ヶ島の皆様、新潟市、西蒲原郡の並々ならぬ御支援を下さいました方々にお詫びと御礼を申し上げます。

北先生の略歴

一、明治四十一年、早大哲学科卒業。
一、茨城県立土浦中学、東京府立第三中学に教鞭をとる。
一、大正三年より同七年まで早大哲学科講師。
一、大正七年六月渡米、ハーバード大学院哲学科入学、同八年英国に渡り、さらに、フランス、イタリー、スイス等に研学を重ね、同九年四月欧州大戦後、初めての留学生として伯林大学に入学、同十年四月ハイデルベルヒ大学に転ず。同十一年帰朝。
一、大正十四年四月、日本新聞の創刊に際し、編集監督兼論説委員となる。その後、大東文化学院教授兼大東文化協会比較研究所主任。大正大学教授に招かる。
一、昭和三年十月綜合評論雑誌「祖国」創刊、同二十三年まで継続。
一、昭和十年多摩美術専門学校創立（現、多摩美術大学）
一、昭和十一年衆議院議員に当選以来、昭和三十年二月選挙まで連続八回当選。
一、昭和十四年ノルウェーのオスローに開催された万国議員大会に日本代表として出席。
一、昭和十五年政党解消と共に、鳩山一郎氏初め三十七名の同志と「同交会」を組織し、翼賛政治に反対。
一、昭和二十一年十一月、右同交会を中心として自由党を結成するに当たり、創立準備委員となる。
一、昭和二十一年総選挙後、自由党政務調査会長、筆頭総務兼憲法改正委員長。
一、昭和二十二年自由党顧問、国務大臣入閣交渉中、六月二十六日言論パージで追放。
一、昭和二十六年八月追放解除。
一、昭和二十七年一月月刊雑誌「猶興」創刊、同三十一年まで継続。
一、昭和二十八年離島振興対策委員。
一、昭和三十年二月衆議院懲罰委員長。
一、昭和三十二年七月憲法調査会委員。
一、昭和三十二年八月東北開発審議会委員。

北先生著書名

一、ベルグソン哲学の解説及批判（第一編、第二編）
　発行日　第一編　大正三年四月十六日
　　第二編　大正三年十二月二十二日
一、近世哲学史（上巻・下巻）ヘフディング著、北吟吉訳
　発行日　上巻・下巻　大正六年十二月五日発行
　　第四版まで（大正十三年四月十日）
一、哲学より政治へ　発行日　大正七年二月十五日
一、光は東方より　発行日　大正七年八月二十二日
一、妥当性の哲学　発行日　大正十三年六月二十八日
一、西洋哲学史　ロジャース著、北吟吉訳
　発行日　大正十四年一月十五日
一、哲学概論　発行日　大正十五年五月十七日
一、哲学行脚　発行日　大正十五年五月二十五日
一、昭和維新　発行日　昭和二年十一月十六日
一、人心一転の途奥付　発行日　昭和六年二月五日
一、再革命の独逸　発行日　昭和八年七月二十六日
一、思想と生活　発行日　昭和十二年一月十五日
一、ファッショと国家社会主義
　発行日　昭和十二年二月二十日
一、排撃の歴史　発行日　昭和十六年九月十日
一、戦争の哲学　発行日　昭和十八年三月十五日
一、ヒューマニティーの再建　ソローキン著、北吟吉訳
　発行日　昭和二十六年三月一日
一、現代の危機　ソローキン著、北吟吉訳　発行日　昭和三十年六月五日　第三版まで（昭和三十年九月十五日）
一、人生奥付　発行日　不明
一、日本精神の闡明　発行日　不明
一、明治天皇御製　発行日　不明
雑誌（月刊雑誌）
「祖国」発刊日　昭和三年十月より昭和二十三年三月まで
「猶興」発刊日　昭和二十七年一月より昭和三十一年十月まで

昭和三十八年十二月十日　印刷
昭和三十八年十二月十五日　発行

発行者　東京都杉並区井荻三ノ一北佳子方　北吟吉三週忌法要会

編集責任者　稲辺小二郎

印刷所　株式会社　公文社　東京都千代田区神田司町一ノ十二

非売品